



195号

# 家族ってなあに

- 国際結婚・共働き・アルブレヒト由子
- 家族に何を求めるか・東倉啓子
- 家族幻想と解体の現実・森 美恵子
- 夫は私の添加物か・柳澤つや子
- 妻は夫を変えられる—私の場合・小泉 明
- 病んで夫と出会った・西出敏子
- 母と子の関係—そして家族のような人びと・奥村典子
- 北欧の家族・吉川富士子

《新連載》伊丹十三のポストモダン映画(1)

ブリンドル玉枝

《新連載》ペルーの女は立ち上がった (1)

キャロル アンドレアス 訳 サンディ サカモト

《連載》看護婦・光と影 ⑬ 増田れい子

あこらめいと 静かでさわやかな説得力と行動力  
下村美恵子さん



# 家族を考える

浅野 美和子

定年が夫にあれば妻にも欲しと眼を窪ませて友はかこちぬ

短歌の批評をしていて右のような作品に出会った。作者はまた「仕ふるのみの半生なり」といふ友ぞ などやり直し思はざりしや」とも、その友について歌っている。すべてを夫と家族に捧げて眼を窪ませ「定年」を求めては果たせない妻はゴマンという。同年代の女として胸が痛んだ。

今年が国際家族年だという。へあごろ〜ではこれまでに、結婚、子供、出産、主婦などを何度かテーマにしてきたが、考えてみれば女の問題の多くは「家族」に収斂する。

社会的労働、家事労働、子育て、介護、夫婦別姓、嫁姑等々、すべて女の側に重荷がかかり、また何ひとつとして家族の在り方に関わらぬ問題はない。

多くの人は当然のように結婚して家族を営む。しかし家族相互の性格や働きかけにより、さまざまな家族ができあがり、幸不幸が生まれる。家族において幸せの条件は何か。一口に言えば、一人ひとりの自由と人権が保証される状態だとわたしは思う。しかし言うは易く実行は難い。先に挙げた問題はすべて、歴史的に形成され、社会のしがらみにしつかりと捉えられているからだ。そればかりか家族そのものが、歴史的に作られたのだから、その役割を終えれば解体するのが当然、という考え方もある。現在の形の家族を維持するかどうかも含め、多くの女性問題の集約点である家族について深く掘り下げて考えてみたい。

## 目次

巻頭言 家族を考える 浅野美和子 1

はじめに 自分自身に力をつけること 平井文子 4

### 国際結婚・共働き

——ドイツ最初の“女性軍医”になった私 アルプレヒト由子 9

家族に何を求めるか 東倉啓子 18

家族幻想と解体の現実 森 美恵子 27

夫は私の添加物か 柳澤つや子 33

妻は夫を変えられる——私の場合 小泉 明 38

病んで夫と出会った 西出敏子 45

母と子の関係——そして家族のような人びと 奥村典子 51

北欧の家族 吉川富士子 59

## 家族ってななに

〔新連載〕伊丹十三のポストモダン映画（1）

1 お葬式

プリンドル玉枝 68

めじやーなりすとのめ 花の命は短くて 長島晶子 80

気になる英語 コントラヴァーシャル 奥川 睦 82

TOPICS 10月に東アジア女性フォーラム開催 84

北京会議に向けて連続講座を開始 ほか 85

〔新連載〕ペルーの女は立ち上がった（1）

序章1

キャロル アンドレアス

訳 サンディサカモト 88

江馬細香ミュージカルを見て 篠崎典子 99

あこらメイト 静かでさわやかな説得力と行動力 下村美恵子さん 重原惇子 100

看護婦 光と影（13） 小西洋子さん（I） 増田れい子 102

あこら読書室 看取ること、生きること／ひとり家族／はじけて拡がるグループネット 107

あこらのあこら 111

カット 横田早苗江  
表紙 真田ふさえ



はじめに

## 自分自身に力をつけること

平井 文子

最近アメリカで入手した女性の生き方に関する詩集の中で、こんな詩を見つけた。

この人生はあなたのもの

あなたの望むことを選んで行い

それを上手にやりとげるために

力をつけなさい

あなたがこの世で大切に思うものを愛し

それを誠実に愛しつづけるために

力をつけなさい

森の中を歩き、自然の一部になるために

力をつけなさい

あなた自身の人生をコントロールするために

力をつけなさい

他の誰もあなたにかわつてそれをするにはできないのだから

あなたの人生を幸福なものにするために

力をつけなさい

(スーザン・ポリス・シュッツ)

この詩は、女性が幸福になるためには「力をつけること」が必要だと言っている。「力」(パワー)とは、具体的には、体力、経済力、学力、知力、気力、実行力等々、「力」のつく熟語が浮かんで来る。近年、世界の女性運動の中で、「自分自身に力をつけること」という意味のセルフ・エンパワーメントという言葉が標語の一つになっているが、この詩を読んだ時、その意味内容が一層よくわかつたような気がした。

そもそも私にとつて、対人関係の基礎は、相手が友人であれ、夫であれ、親であれ、子供であれ、あまり変わらない。基本的スタンスとしては、まず相手に多くを求めない、期待しすぎない、そして相手のためにはできる限り力を惜しまない、しかし、要求すべきは率直かつ大胆であれ、といったところだ。要は「桃李もの言わざれども、下おのずから蹊<sup>せき</sup>をなす」(「史記」)の精神で、なにより自分自身を磨くことが必要だと思つてゐる。これは夫に対してもあてはまり、「色気」だけではなく、人間味において夫を魅了しつづけることが肝要で、夫も妻を魅了しつづければ言うことはない。

とはいえ、日常生活の場ではなかなかそうもいかないのが現実である。だからここぞという時に相手を感じ動させられれば十分である。それには、互いの人間的成長を喜び、援助し合うこ

とが何より必要である。もつともそういう人間の成長を支え合うだけの絆を持ってない夫婦は、根本的に考え直すことも必要かと思われる。

私たち一家は、八〇年代の二年間、アメリカはマサチューセッツ州に暮らす機会にめぐまれた。私が滞米中にそれまでと大きく考え方を変えたもののひとつに「家族観」がある。アメリカで知りあつた一人の女性カレンと彼女の人生が、私の家族観、ひいては女性の生き方を変えたのである。

ベトナム戦争当時大学生だった彼女は、在米パレスチナ人研究者と愛し合い結婚、夫の影響もあり彼女は中東問題に目覚め大学院に進んだ。彼女はすでに不妊手術を受けていたので子供はできない。二人はレバノンにいたパレスチナ難民の孤児を養女に迎え、育てはじめた。アラブ人の伝統的考え方からか、夫は育児に少しもかかわらない。彼女は勉学と育児の両立に悩み、夫に協力を依頼すると、そんなに大変なら学校をやめたらよいとの返事。そこで彼女は離婚を決意した。彼女は学問を捨てるわけにはいかなかった。日本ではこうした場合、女性はかえって不利になるが、アメリカでは離婚後も子供は両親が平等に養育する義務がある。私たちが知り合つた頃、養女は、父親と一緒に住んでおり、夏休み等、長期休暇の間は母親のところに来ていた。当時カレンは再婚しており、現在の夫との間に二人の息子を養子に迎えていた。私たちが初めてカレンの家にパーティによばれた時、私はこの家族の構成と成り立ちを聞いておどろいてしまった。白人夫妻、中南米系の二人の養子、そして妻と妻の前夫との間のアラブ系の養女の五人は、互いに誰とも血のつながりがなく、人種的、民族的にも多様である。もちろん事情が事情だけに様々な困難をかかえているようであつたが、この五人は深く愛し合つて



おり、互いに尊重し合う家族をつくり上げていた。カレンと夫とは家事・育児を完全に分担しつつ、共に大学教授としての活動を支え合っている。現在カレンは、二人の息子の世話を夫に任せ、エジプトに六か月の予定で留学している。

実子がいるにもかかわらず養子縁組を積極的に受けとめている家庭にも出会った。その白人夫婦は、娘と同じ年代の黒人少女を養女にし、娘の姉妹として育てている。動機を聞いてまた感心した。つまり、この夫婦は生活全般に少し余裕ができたので、自分自身の内なる差別意識を克服するためにあえて黒人を選び家族の一員として暮らすことに挑戦したというのだ。二人のお嬢さんは犬ころのようにじやれ合って仲良く暮らしているようだった。

ところで、日本人の家族観の基礎は「血のつながり」といわれる「家族制度（家父長制）」にあると思われる。そして親子関係も、夫婦関係も、世代関係も、すべて血のつながりと家父長制という二つの意識に縛られている。そして反対にこの二つの意識に良かれ悪しかれ頼ったり、甘えたりする傾向もありはしないだろうか。親なんだから、子供なんだから、嫁なんだから、または夫なんだから、妻なんだから、こうしてくれてもよさそうなものだという家族からの無条件の期待に、私たちはどれだけ拘束されていることだろうか。ヒューマニズムや人間愛が、血のつながりの枠を越えてどれだけ広げられるだろうか。実際私自身、アメリカでの家族の在り方の例を知らないうちは、養子縁組について、その動機を専ら家系を途絶えさせないためとか、老後の安心のためとかいう無意識の打算によるものと思っており、子供と暮らすことから得られる豊かな人生とか人間として成長するために他人ましては他人種の子供をあえて育てるという境地など、とても理解できなかった。

こうした境地は老後に独りになった人々の生き方ともつながる。アメリカでは、配偶者を失った人の多くが、子供を家族の一員として暮らすより、再婚あるいはボーイフレンド、ガールフレンドと暮らすことを選択している。結婚より内縁関係を選ぶ場合は、主に遺産問題で子供たちとの間のトラブルを避けるためであるようだ。

年をとつても、ボーイフレンド、ガールフレンドと呼ぶところなど、男女の関係のあるべき姿を垣間みたような気がした。子供世代はそうした老親の生き方に大いに共感している。

夫とのつき合いは長い。定年後毎日家にいる夫の存在がうとましくてたまらず、それがストレスとなつて神経性胃炎をおこした女性を知っている。考えてみれば子育て中心の家族の時代は意外に短く、老親と一緒に、あるいは二人きりの家族の時代は結構長い。夫も妻も人間として、社会人として、生活者として、自立することが、いよいよ必要となつてきた。そのためにも、自分自身に力をつけることに熱中しよう。

（中東問題研究家。千葉大学・白梅短大講師。家庭塾経営。夫・子供三人、夫の母と六人暮らし。一九四三年三月生まれ。）

## 国際結婚・共働き

——“ドイツ最初の女性軍医”になった私——

アルブレヒト 由子

二十七年前に初めてドイツへ来た時には、将来自分がドイツ人の中で仕事をするようになる  
とは夢にも思っていなかった。いろいろな偶然の要素が重なった結果だったが、今思えば専門  
職を持っていたのは非常に幸いした。

## 私の結婚

私は愛知県半田市の歯科医の一人娘として生まれ、親の希望どおりに歯科大学を卒業した。  
明治生まれの父は娘が可愛くて、隣の県さえ嫁に出すには遠すぎると考えていたようだ。実際  
に具体的な結婚の話がおきてくると、父の心配は果てしなく、もしや娘の婿は昼はゴルフ、夜  
は遊びに忙しく、診療所では我が娘が日夜一人で働くことになるのではないかと悩んでいた様  
子だった。そんな折、私はペンフレンドの一人だった今の夫の招きで初めてのヨーロッパ旅行  
をした。彼とは十二年間英語で文通していたので、ある程度お互いのことはわかっていて、こ



の旅行から帰つて後、父のほうから、将来ドイツで暮らしてはどうかと言ひ出したのだ。私には兄弟も親戚もなく、親もいつまでも生きていられるわけではない。それならいつそ社会保障制度が日本より充実しているドイツに住まわせたほうが将来安心と父は考えたようだった。この決断はもちろん後々まで近所の人には誤解され、一人娘が親を捨てて外国へ行つたと言われ続けた。

当時のドイツは今よりもつと地味な国で、日本の食品は手に入らないし言葉はわからないしで、夫が出張すると私はすぐ日本へ帰つていた。その後娘が生まれ成長するにつれ、友人知人も増え、そうなるとドイツ語もだんだんとわかるようになった。娘はドイツの子供なら当然知つてゐる童謡・童話などひとつも知らずに幼稚園に入つたため、最初は一人だけ教室の隅でボツンとしていて、あとから思えばもつとレコードなど聞かせて教えてやればよかつたのにと後悔した。

## 母の渡独

車の免許はすでに日本で取つていたのだが、ドイツではそのまま書き替えてもらえず、改めて自動車学校で理論を学びテストを受けなければならなかつた。その時、ドイツ人の頑固さと手続きの繁雑さに驚き、この時点ではまだ必要のなかつた歯科免許の書き替えを申請し、結局長トゲンの講習など一部分をやり直すだけで二年後にドイツの歯科免許を手にした。

日本では、自分も歯科医だつた母は父を助けて小さな診療所をきりもりしていた。当時母は



やらなければならぬことをたくさん抱えて、いつも走っていた。そんな状態のとき突然父が病気で亡くなり、母はすっかり生きる張合いをなくしてしまつたようだった。二か月後に母をドイツへ連れてはきたものの、我が家はサラリーマン家庭で、しかも家はその年新築したばかり。とても女二人が毎日家の中であることなどなくて困つてしまつた。

## ドイツで再び学ぶ

この時、偶然新聞の求人欄で、隣町の歯科医が衛生士を捜しているのを見つけて行つてみた。私のドイツ語はまだ必要最少限で、専門語もドイツの薬品名も知らなかつた。だから最初から歯科医として就職する勇気がなかつた。この隣町の先生は、地元のキール大学の出身で、私を衛生士として雇う代わりに親切にも母校の歯科病院院長宛に紹介状を書いてくれた。おかげで母は家事責任者として、当時十歳の孫娘の世話も含めてまた家庭の中心に返り咲いた。あとはとんとん拍子でキール大学歯学部病院保存科に助手として採用された。当時私はもう四十歳で、他の若い助手の中に入つてやり直す限界の年齢だった。一般に日本人は若く見られるのが幸いして、勉強し直すことができた。午前中は学生と一緒に講義を聞いたり本を読んだりして、午後は治療室で学生指導をまかされた。でも、実際には学生のやつてゐる事をみて私の方がたくさん学んだ。

大学病院は費用とかノルマにとらわれず理想を現実につなげる場所なので、ここでの二年間は、後の仕事に非常に役に立つた。この職は運転免許がなくても歯科免許がなくてもつけない

仕事であつたので、まだ必要のない時期に両方取つておいたのは幸運だつた。

## 軍医への道

一応自分の科の最新知識と技術を覚えた頃、我が家から車で十分ほどの所にある海軍基地の診療所で歯科医を捜していると夫が聞いてきた。病院にいても、いつも、家に残してきたドイツ語のわからない母と幼い娘のことが気になつていたので、緊急時に十分以内に我が家に帰れる職場は理想的だつた。ボンの防衛庁へ問い合わせたところ、当時歯科医が不足していたせいか、連日のように病院のほうへ誘いの電話がかかり、とうとう引きぬかれる形で職場を変つた。

私が結婚した時には日本とドイツの両方の国籍を持つことは許されなかつた。ドイツに永住を決めた身としては、結婚当時ドイツ国籍を選ぶより仕方がなかつたが、もしドイツ国籍でなかつたら海軍に入隊することはできなかったわけである。また歯科・医科・薬科大学をすでに卒業していることが女性の入隊の条件で、私は陸海空合わせて女性入隊者の五十二番目、海軍の女性歯科軍医としては第一号だつた。

まずミュンヘンで四週間にわたる兵隊としての基礎訓練があり、オリブ色の戦闘服を支給され、挨拶の仕方からピストルの分解、種々の書類の記入の仕方など、いろいろ教えられた。現在では医療部門に限り、医学を勉強していなくても一兵卒として女性が入隊でき、高卒後、軍の援助を受けて医科大学で学ぶことも可能だ。ただし、この場合には資格取得後、一定の年

限、軍隊で働くことが義務づけられている。ミュンヘンでの四週間は、私にとって新しいことの連続で、団体生活も初めてであつたし、大事なことを未熟なドイツ語で聞き漏らすのではないかと緊張の毎日だつた。樂天的な夫のはげましがなかつたら一週間でやめていたことだろう。海軍での女性第一号歯医者ということで、その後いろいろな面白い体験をした。二年契約で入隊し、結局十二年勤務したが、途中の二年間を除いてずっと自宅近くの基地に勤めることができて幸せだつた。軍隊では普通の診療所では経験できないことも多く、これも今大いに役立っている。

最初の上司は、私に「三分の一は歯科医として、三分の一は将校として、あとの三分の一は人間として、努力してほしい」と言つたが、この言葉はずつと頭にあつた。軍はとても公平で、外国人とか女性とかの偏見は全然なく、入隊して六年という、規則にある最短の年数で軍医中佐まで昇進させてくれた。腕章の金線ではつきり位の上下を意識させられる世界には、もちろんねたみや足をすくおうとする人もあり、こういう人との様に対応していくかは本来の歯科医にはない問題だつた。

### 共働きは家族に支えられ

ドイツでは一般に朝は早く、勤務が七時十五分に始まるため、午後は四時十五分に終わった。でもここではどの店も一斉に午後六時には閉まつてしまうので、短時間で買物をすまさないければならない。スーパーのチラシなどで安い品を見ても、時間が足りなかつたりお勤め帰り



の人の殺到する時間帯では駐車場が見つからなかったりで、ほとんど利用できなくて残念だった。このあたりは仕事が進んでから遊びに行く所も少なく、お店も閉まってしまいうから、この夫もまっすぐ帰宅する人がほとんど。いきおい家庭の手助けをする人が多い。私が十五年間勤めにいられたのは、いろいろの幸運があつたためと思う。

第一には母がタイミンクよくドイツへきてくれたことだ。その半年前だったら私たちはまだアパート住まいで、独立した母の部屋はなかったし、数年後では年齢的に大学には採用してもらえなかった。

第二に娘が健康で、学校のことは全部自分でやるタイプだったことである。娘が生まれた時に父は将来混血児として学校でいじめられるのではないかと相当心配したらしいが、これは幸いにもなかった。娘は今でも私は半分日本人だからと誇りにしている。小さい時から「あなたは日本の良いところとドイツの良いところの両方を満喫できて幸せ」と話していたので、これがよかったようだ。現在は半年間にわたって行われる歯科国家試験の真つ最中だが、日本だったら学資が高くて歯科大学へは行かせてやれなかっただろう。ここでは授業料はタダだから長い夏休みにアルバイトをして自力で卒業するのも不可能ではない。ドイツでは大学生の子供を全面的に援助している親は稀で、子供のほうも親が苦勞して学資を出してくれたという意識がないためか、成長してからの家族の繋がりが少ないように思う。私の知人のある開業医は三人の子供がそれぞれ独立して家を出てしまい、広い家に夫婦二人だけで暮らしているのに母親は近くの養老院で一人ぼっち。そして母親も子供もそれを当然と思っているようだ。また一人暮らしの老人も多くみかけるが、一人用にこまごまとスーパで買物をしている姿をみてかわい

そうになつてしまふのは、私だけのようだ。

幸運の第三は、車の免許と歯科の免許を取つていたことである。特に地方都市では前例のないことについては決断を下したくない人ばかりで、どんな書類でも外国人の場合には早目に準備しなければならぬことを学んだ。

第四には夫と家族の協力である。時間があるほうが買物をしたり料理をするだけでなく、PTAにも父親の姿のほうが目立つた。ドイツの社会機構が共働きしやすい状態になつており、夫の協力が得られやすかつた。また母は、どの道ちよつとしたことでいつも助けてくれた。

そしてこれから…

私は軍隊での任期を延長しないと決めた時に、将来は独立して、ドイツの会社が日本へ進出する際に手助けをする事務所を開きたいと決めていた。もちろん歯科の仕事を続けるのが私にとつて一番楽で安全なことはわかつていたが、一度は、人に雇われることなく自分の判断で仕事をしたかつたのだ。昨年六月に事務所を開設するまでの約三年間は、時間と機会がある度にいろいろな勉強をした。ビジネス英語を習つたり、外国人に教える日本語の講習も受けた。アジア経済についての講習会に出席したり、いろいろなドイツの会社で短期間ずつ働いたりした。あるドイツの会社の東京支店に二か月出張したこともある。この時娘は大学近くのアパートに住んでおり、家には八十四歳になつた私の母と夫の二人を残して行つた。母は私が新しいことを始める度に、「今がきつとチャンスだから、そして私は大丈夫だから」と励ましてくれ

た。母と夫はお互い言葉が不自由なため喧嘩することは全くなかったが、それまで何をしても娘の側についていた母は、二か月の留守の後はずつかり夫のファンになっていた。母が掃除係で料理の好きな夫が台所係だったようだ。

母は七〇歳でドイツへ来たが、年をとつてからの移住は難しいと思った。まずドイツ語が覚えられず、新聞を読んだりテレビを楽しむことができなかった。それまでの友達との付き合いもなくなくなってしまう。幸い私の母は少量なら何でも食べられる人だが、「断然和食でなければ」というお年寄りだと、これも大きな問題である。

私の側からは、母が日本なら一人でできたこと、例えば病院、美容院、買物など全部付き合わねばならなかった。また外で発散できない母にはいつも勝ちを譲り、言い争いはさけることと夫婦喧嘩はしないとかは守り続けた。母は八二歳頃までは毎年一度、五―六週間、一人で日本へ行き楽しんでた。実の母娘でも、十七年間毎日一緒に暮らすにはお互いの理解と努力が要るのは確かだ。幸い夫がいつも「おばあちゃんがいてくれたから共働きができた」と言ってくれるので、母は居心地は悪くないようだ。

当初ドイツの会社の手助けをするつもりで始めた私の事務所の仕事は、今のところ反対にドイツ市場に関心のある日本の会社の仕事のほうが多く、改めて日本人の積極性と機敏さに驚いている。始めたばかりで、まだこれからだが、誠意を持つて行う仕事は、誰の心にも通じると信じている。そして今後も機会があれば何でも勉強していきたいと願っている。

# あなたの手づくり品を展示即売

アルブレヒト由子招聘ドイツ・キール展へどうぞ

☆ 旧西ドイツの北端の都市キール市の郊外エカンフェルデ市で、あなたの手づくり作品の展示即売会をしてみませんか。

キール市在住27年のアルブレヒト由子さんが、日本への帰国の折、日本の女性たちの手芸展を見て感嘆。このすばらしさをぜひともドイツの友人たちにも見せてあげたい、できたら日独の草の根の市民交流も実現させたいとの願いから、この企画が生まれました。

作品展示だけでも、即売されても、かまいません。売り上げ金は全部ご自分でお持ち帰りいただけます。

☆ アルブレヒト由子さんは、日本で歯科医をされていて、ご結婚でドイツへ行かれ、ドイツ海軍の基地キール市で、軍医を勤めてこられた方です。女性の軍医はヨーロッパでも珍しく、しかも日本女性。ドイツでは有名な方です。

退官にあたり、今回はボランティアで私たちのドイツ滞在中、通訳はもちろんのこと、バス、ホテル、展示会場の手配などすべての企画のお世話をさせていただきます。

☆ 帰途、フランスはパリに立ちより、市内観光の後、ロアンヌへ足をのばし、三ツ星レストランのトロワグロで豪華な夕食、そして古城シャトー・ド・マルテで宿泊。

☆ 一行36名（添乗員1名）。先着25名を受け付けます。お早めにご連絡ください。

日程：1994年11月3日（木） 名古屋 AM7：40発エールフランス

11月12日（土） " PM5：30着エールフランス

全行程費用：35万円（航空、列車、バス代、食事代、ホテル代、会場費、事務費、等）

展示会：1994年11月5日（土）～11月6日（日）

参加作品には、数点に賞を、また全参加作品に出品認定証を授与します。

場所：ドイツ・キール市の郊外Eckernförde（エカンフェルデ）市のSTADTHOTEL TEL：04351-6044

共同企画：☆ウイン女性企画 TEL 052-251-9064

☆Japan Geschäfts-Service(ドイツ)

TEL 04351-41044



# 家族に何を求めるか

東倉 啓子

## —家族幻想—

和気あいあいとした家族の食卓の場面、それぞれが笑顔で明るくて——ところが突如として暗く不機嫌になる。そう、みんな「家族団らんドリンク」を飲んでいたのであった、というオムニバスドラマがあつた。実際にはそんなドリンクはないにしろ、家族といると疲れするという声をよく耳にするのは、誰もがちよつと無理をしても円満にやらなくては、という幻想にとらわれているからではないだろうか。外から帰ってくる家族をくつろがせるために、無理している主婦も多い。そんな家の中から解放されるために、レジャーに出かける人が増えてきた。しかし、このレジャーがくせものなのだ。道中の電車の中ではひたすら居眠りのお父さん。帰ってからたまつた家事に忙しいお母さん。仲の良い家族を演じて、空回りしているようだ。

「家の中だとしらけるから、よく出かけるのよ」という人もいる。一年で一番楽しいはずのお正月や連休が、一番憂うつな時期となることもある。そのためには、学校や会社での愚問は

やめてほしい。

「休みは楽しかった?」「どこか行つた?」

## —家と家族—

結婚してギャップを感じたことの一つは、家（住まい）のことである。結婚前は戸建てで育ち、今は3DKのマンションに住んでいる。昼間は一人で自由にできるのだが、どの部屋にいてもくつろげない。どの部屋も台所に面していて、生活空間だからだろう。娘時代のように、二階でポリウムを上げて音楽を聞くというわけにはいかない。まして家族がそろつたときには、狭いゆえのいさかきも起きる。テレビがついていれば、否応なく目に入ってきて、本も読めない。ピアノの練習や電話も同様で気を使う。また、一人でお茶を飲もうと思つても、子供が寄つてくる。子供のダラダラした姿も視界に入つてくると、怒る回数が増える。洋裁などやり始めても、すぐに片付けなければいけない。要するに、家族の物理的距離がとれず、プライベートがないということだ。

では、大きな家に住んでいる人は、快適な家族生活を送っているのだろうか。ある友人は、テレビを自分の部屋で見ると、広いだけに昼間一人だとよけいに淋しいという。おもしろいことに勉強部屋が与えられている子供でも、「家では勉強ができない」と図書館に通う。書斎のある男性は「家だと考えがまとまらない」と喫茶店に足を運ぶ。まして無理してローンで家を買った場合は、主婦はパートに出ていて、夫や子供たちも家にいる時間は少なく、あまり家を

利用（？）していいといえる。せっかく買った家を、子供が巢立ってしまうと、広すぎる、と便利な都心のマンションに住み替えた人もいる。ないものねだりかもしれないが、どんな住まいであれ、すべての要求を満たす家はないのかもしれない。家と外との関係も重要になってくる。

—おうちに帰りたいたい？—

私の元上司は、会社にいる時が一番落ち着く、「早く家に帰ってもしようがない」と、仕事が終わっても机の前にすわっていた。そう、男たちはこのデスクが大好きなのだ。恋愛結婚した同僚は、家での妻の姿を見るとげんなりするという。自分はリラックスしたいのに、相手がかつろいでいると幻滅するというわけだ。妻が妊娠中や子育て真っ最中の時期に、浮気する男性も多いと聞く。「煩わしい」というこの一言で逃避する男たち。——でも女たちは投げ出さずにやっている。「私だつて面白くてやつてんじやないわよ」というこの叫びを口に出したとき、返ってくる文句はほぼ決まっている。「誰のおかげで飯が食えると思ってるんだ！」

おれの居場所がないとばかりながら、自分から影の薄い存在になっている男たち。

うちの亭主も帰宅拒否症にかかっていたと思える時期がある。私の不機嫌がこわかったのだらう。マンションの廊下の足音が家に近づくにつれ重くゆつくりとなり……やがて止まる。おもむろに鍵をあける。その頃の私は、育児で疲れ切っていて、夫が帰ってきてても、「もう帰ってきたの？ ごはんの用意まだ出来てないよ」と冷たい言葉を浴びせ、快く迎えたことがなか

つた。酔つ払つて帰ることも多く、ドアの前で「啓子——！」と叫んでいた夫は、きつときみしかつたのだらう。今思えばかわいそうなことをしたと思うが、その頃の私には、もうひとりの子供を受け入れる余裕はなかつた。

### ―“もと家族”の方がいい女たち―

「うちの家ではね」が、結婚当初の私の口癖だつた。そういう度に夫の鋭い視線。私は、いつまでも娘のままでいたかつたのだ。幸い（？）私の母は結婚式が済むと私の部屋を弟に使わせ、思い出の物も全て片付けた。が、ある友人のお母さんは、彼女のものを処分せず、いつでも泊まれるようにしてくれているという。彼女も毎日朝ドラが終わると、実家に電話して「そちの天気はどう？ 今晚なんのおかずにする？」というやりとりをするような。誰だつて自分の親とのほうが話題も多く楽しい。しかし、家を出た娘が母親の愚痴の聞き役というのは、実家の夫婦関係がしつくりいつていないからではないだろうか。実家で食事するのが何よりの楽しみという若夫婦も多いが、その回数が増えてくると二つの家族の境界があいまいになってくる。なにも仲良くつきあうのが悪いという意味でなく、新婚夫婦が自力で家族を営む意志を持たないまま、楽しいひとときばかり求めるのは危険のような気がする。また、老夫婦も孫が来たときだけ笑う、というのでは、淋しすぎる。

結婚生活になじめなかつた私の第一の原因は、家事が辛かつたことである。実家で祖母と同居していると、台所に女三人は必要でなく、争いに巻き込まれるのを避けてひたすら勉強し

た。その結果、家事能力ゼロのまま嫁入りとなつたのだ。特に子供が生まれてからは、こんなに効率の悪い世界があつたのかと、がく然とした。そして母のありがたみを感じると同時に、「こんなことよくやってきたなあ」と呆れた。それでも生き物の赤ん坊をほつておけないのでやることはやつた。が、とても惨めだった。家事より外で働きたかつた。しかし、今考ええると単にダーティーな仕事「手を汚すのがいやだったのだ。その意味でも、実家との関わりは捨てられないのだ。

### ―知的で愚かな主婦たち―

母の時代に比べ、高学歴の女性が増えた。しかし、机上の勉強は実地（生活）には少しも役に立たない。特に母親としての賢さは別だと思い知つた。私はその典型で、甘えてくる子供を邪険にして、育児書を読みあさつた。「おまえは人の言葉より、活字を信じるのやな」と夫に言われても、私が正しいと思うことをやつた。まず自分の時間を確保するために、無駄な時間を省いた。たとえば、子供のおやつはボロボロこぼれるものを避けて、一個で満腹になるあんぱんやカステラを中心にし、食べ終わつたらすぐに片付けた。子供に良いおもちゃ、絵本しか与えず、よその子が来ても「つままない」家となつていた。

そんな私が近所で孤立するのは、必然の結果だった。そして長男の言葉の遅れがわかつたとき、ある奥さんから「お母さんが本ばかり読んでいたからじゃない？」と高飛車に言われて、一晚中泣いた。その頃は「そのうちしゃべるわよ」と励ましてくれる人の言葉も素直に聞けな

くて悲観的になつていた。でもある相談員に「花を見てお子さんがきれいと言わなくても、心で思っているだけでいいじゃないですか」と言われてハツと気づいた。私は表面的な言葉にとられて、子供の目を見ることすらしなかった。半端なインテリママはどうしても気持ちより言葉が先行してしまうのだ。表現力がありすぎて（「口が達者」子供を追いつめてしまうのだ。夫婦間もそうなのだが、会話しないと落ち着かない。でも人の心のすべては言葉に表わせないと知った。長いトンネルから抜け出たとき、息子もいつしかしゃべるようになっていた。知的ママは、努力、頑張る、充実、評価——これらの言葉が大好き。当然、無駄を食つて生きている子供の世界とは相容れない。上から下にしか物が言えなかった私は、家族の中で権力者になつていたのだろう。また、因果関係がはつきりしないと気持ちが悪い。こうだから、あなる、と原因を明らかにしたい。しかし、家族の問題は、判例があてはまらない。

### —「家族的」という言葉—

私たちにとつて「家族する」のがこんなにも気の重いことなのに、外の世界では（日本人は）家族ごつこが好きだ。就職の時も「我が社はとても家族的で——」と社員の親密度を吹聴する。同族会社から発展した企業が多いから仕方ないかも知れないが、家族ぐるみのつきあいが良しとされるのも負担だ。社宅制度がその典型で、妻たちも「うちの会社」と言い、公私ともに親しい。休日でも家族の単独（？）行動がとれなくて嘆いている人もいる。テレビアニメでも、会社の連中と家で食事をもにしている場面が多く出てくるが、子供向け番組だからこそ、

こういつたすりこみはやめてほしい。「みんな仲良く」がいいとは限らないのだ。

子供と言えば、学校でも「家庭的」という言葉が評価される。女性教師が低学年に多いのも、「母親」のようなきめこまやかな指導が要求されるからだと聞く。小学校の「ほけんだより」には、「朝排便を済ませましょう」「朝食の献立の例」「重ね着の仕方」という条項がある。今の母親がなつてないからと言われるが、「かゆいところに手が届く」教育が、子供のためになつていゝとは言えない。

### ―家族を外に求めて―

今「外べんけい」の子が増えているという。家の中ではおとなしいのに、塾やおけいこの教室では行儀が悪かつたり、先生に甘えたりするそうだ。家庭ではいい子でいて、外ではめを外してバランスをとつているのだろうか。私が家庭教師をしていたときも、その母親から「この子の話し相手になつてください」と言われた。今は鉄棒などを教えてくれる体育系の家庭教師もモテモテだそうだ。いわゆる「ええとこの子」ほど、お金がある分、寂しいのかもしれない。コンビニやビデオ屋さんの店員に心を許す少年たち。「お兄さんのようにやさしかったから」と暴力団の仲間になり、「親身に話を聞いてもらえたから」と宗教団体に入会する少女たち――どうしてこうも「心のスキ間」が大きくなつてしまったのだろう。

家族に飢えているのは子供たちだけではない。美容院に入るなり、堰を切つたようにしやべりだす女性。医者の待合室で元気に(?)おしゃべりする老人たち。訪問販売の被害が後を断

たないのも「人恋しい」思いをしている人が多いからだろう。専業主婦だつて、孤独だからパ  
ートに出たり、新しい恋を探したりするのだろうか。

「人妻を口説くのに金はかからない。愚痴を聞いてやるだけでいい」と豪語する男もいる。  
ミヒヤエル・エンデの「モモ」のように人の話を真剣に聴く人は、今は貴重な存在だ。身近な  
人、家族の話がなかなか聴けない。否聴きたくないのだ。老親と同居していても、外の生活時  
間の方が長く、疲れきつて話すゆとりがない。だから、自分が年老いたとき家族さえ居れば寂  
しくないというわけではない。また、他人のほうが本音を言えるということもある。私自身、  
今まで家族以外の他人の言葉に支えられて、今日までなんとかやつてこれた。

### —「あの人よりもまし」という幸福感—

ワイドショーの視聴率が依然として下がらないのは、やはり、人の不幸は蜜の味だからだろ  
う。結婚してから母に不満を言おうものなら、「あんたは恵まれているほうなのだから、幸せ  
と思いなさい」と言われた。そうして幸せと思おう、と努力してきたが、どうしようもなく不  
安で、他人の生活に興味が湧く。女の足を引っ張るのは女だと言われるが、それは先輩の女性  
たちが幸福感を味わつてこなかったからだ。むしろ、苦勞を売り物にしてきたことが問題なの  
である。「私もやつてきたのだから」と、家庭で職場で繰り返し返されてきた。祖母からも「樂は  
苦の種」「苦は樂の種」と、樂しむことは罪惡のように教えられてきた。しかし、今私は「苦  
は苦を呼び、樂は樂を呼ぶ」と確信している。我慢や苦勞をしすぎると押しつけがましくな

る。たとえば子供に「育ててやったのだから」と――。

### ―幸せになるために―

老いも若きも家庭でのびのびしていない。その原因の一つは、役に立つ存在であろうと、無理しているからではないか。「金も稼げなくせに一人前の口を聞くな」と、子供たちを弱い立場に追いやり、お年寄りの価値を踏みにじってきた。なんの役にも立たなくなつたつて、みんな対等なんだ。経済効率優先に回っている外の世界とちがつて、家の中は歯車が噛み合つてなくつたつていいじゃない。家族は人に見せるためじゃないんだから。

ただ、本当の意味での個人主義をふまえていないといけない。ドラマの中で「好きなことをしたいなら家族なんて要らないじゃない」というせりふがあつた。自由、不自由の感覚も人それぞれ、愛情を欲する割合だつてちがう。だからひとつ屋根の下で暮らす難しさがある。シングル、所帯持ち、両方に辛さとメリットがある。それをちよつとしんどくなると、あの人はいいなあ、とうらやましがつていたので進歩がない。常に選択はひとつ、おいしいところだけをつまみ食いするのは卑怯だと思う。私も、こんな平凡な生活、と自己否定してた頃は、不幸だつた。しあわせになりたいなら、他力本願をやめて自力本願に。ユーミンの歌に「他人の寂しさなんて救えない」というフレーズがあるが、私たちは決して寂しさを埋めるために家族でいるわけではない。むしろ、家族は「幸福のために闘う（カーネギー）」ための戦友なのかもしれない。

# 家族幻想と解体の現実

森 美恵子

私にとって家族は、夫と子どもたちで、私の命であり、運命共同体だと、十年前までは思っていた。しかし私一人の思い込みだった。小学三年の時、父母がいて、家族がにこやかに食卓を囲む信頼しあつた家族像を作文に書いた時から、家庭を夢見、両親の離婚で果たせなかつた家族を見つけ、作ろうとした。

結婚・家族幻想は、「黙つておれについてこい！ 幸せにしてやる」という横暴な言葉にも抵抗もなく、かえつて力強いと感じさせた。母からの反対に対して反抗的で、母の支配からのがれたかつた。シアワセという抽象的な言葉にとらわれ、何か違うと感じてきても、幻にしがみついて、幻を見ているほうが楽だった。私一人の思い込みと気づくことへの恐れで家族幻想をしていた。私が、なんとかしなくては、私が一生懸命していれば、と抱え込み、精一杯やり続けられ良い結果が生まれると信じていた。夫の女性問題や賭けことについても、注意したり、やめてほしいと頼んでも聞いてもらえず、結局は許し、許すことが良き妻であり、こんなことぐらいとガンバッテ自分をごまかしていた。繋いでいきたい、繋いでいこう、という思い

が、ブツツンと切れた途端、何もかもガラガラと崩れ落ち、過ぎたる愚かさを思い知らされた（十五、六年前から家庭内別居や娘の登校拒否等、家族間の問題は起きていた）。離婚、家庭崩壊、敵対心、憎しみ、恨み、怒り、増幅され谷底へ流されていった。

何が残されたのか？ 夫や家族からの束縛と自縛からの自由が残った。一番ほしかったものであった。結婚も出産も、全て選んで歩いてきた道。それに対してはつきりと目覚めて選んだ道「離婚」。（価値観の違いと敵対心のつものの中で生活に終止符を打つことが自分を生きることにつながると信じた）。夫は、「出ていけ！」私、「（ありがとう、やつと言ってくれた）。今日は出ていけないけど、時期を見て出て行きます」落ち着いて怒りもなく、淡々としていた。子供たちに折を見て話をした。子供たちは敏感で、両親の敵対心をずーっと昔からキャッチしていた。

長女（二三歳）——少し女性学を勉強している。「好きで一緒になつて、嫌いになつて別れてもいいんじゃない」と好意的だった。「お母さんもいろいろガンバツてきたんだから自分のこと考えてもいいよ」

長男（二一歳）——「家のことはどうなるんだ。母としての責任をどうするのか。身勝手じゃないか」と、不服、不満。

次男（十八歳）——「不機嫌な暗い顔をして、溜息して、愚痴つてくるくらいなら、早く決めた方がいい。ぼくはどっちでもいい。すつきりしたい」

次女（十五歳）高校入試——「私の一番大変な時、大切な時なのに——。私のことを考えて

ほしい」とずーつと不満であつた。

三女（四歳になつたばかり）——わかつてゐるのかいないのか……食事をしていた。心は言えないだけ、余計に複雑だつたと思う。

別居して半年たつた時、三女が、「お母さんは、お父さんを嫌いになつたからいつしよにいられないんだよね。でも私、お母さんもお父さんも好き。だからいつしよにいたい。お母さん帰つて来て！」と言つたが、私は、「ごめんね。その通りよ。だから一緒に暮らせないの。ごめんね」としか言えなかつた。

二五年間、呼べど叫べど何も返つてきません。そうよね、幻の中であがき苦しんで、家族全員を巻き込み、目覚めた途端……ゆめ、ユメ、夢……。悪夢は寝起きが悪く、頭も体もスツキリしませんよね。ブーツとして、はつきりしないけど、体は動かしている状態。何もかもから離れ、どのように自立し、自己確立するかと思ひながらも、考えることから逃げたかつた。ただガムシヤラだつた。実家に身を寄せていた。

夜遅く帰ると、母から「おまえの離婚は間違つてゐる。五人もの子供をおいてきた、捨ててきた」と責められた。その上、家族からの恨み、怒りが伝わつてきた。私が抜けた後の家事雑事が、それぞれにかかつていき、自分たちがしていかなくはならなくなつたことと、私が自由に振舞つて家族のことを忘れてゐると思ひ込んでの恨み。

妻とは、母とは、こうあるもの、こうしてくれるもの……家庭を守り、家族につくす……家族愛？？？……。



家族とは？ 家族愛とは？ 束縛し、攻撃し、押しつけ、支配される。もう、良い娘にも、良い母にも、良い人にも、なりたくない。本当に愛するとはどういうこと？（無償の愛）——私は私自身を大事にして、愛しているか？ 自分が一番大事なのに、大事にすることは罪だと思っていた。（自分を愛せないものは人から愛されることはない）。人のことを一番にして、人に良くして、人に良く見られたい。偽善そのものであった。認められたいという思いが強かった。

家族に対しても、本当はどうであつたか？ 家のため、子のため、主人のためと言いがら、家族を管理し、支配し、小言を言い、攻撃し、こうあるべき、してくれないと「べき論」を押しつけ、くれない族だつたのか。一生懸命努力することで報われるという母からのやり方を、知らず知らずにまねしていた。母から逃れたかつたし、母のやり方は好きでなかつた。同じようなことをしていたと気づいた時には愕然とし、目の前が真っ暗になつた（私は母と違う家族関係を作るといふ思いが強かつたので……）。そう、楽しくもおもしろくもなく、なんでもやりすぎ、引き受け、よかれよかれと思ひ込み、それでもうまくいかない、溜息をつき、愚痴を言っていた。（いろいろ悩んだり、これでいいのかと自問自答はしていたが、思つてやっているから正しいという思ひ込みだつた。待てないで先回りしていたのだ）。

——笑い声なんてわいてこないよね——。いつも緊張させていたのだから——。早く早くと追い立て、せっかくだからそうしたほうがいいと押しつけて、行動を管理してきた。家族のきずなを築き積み上げて、一人一人の思ひを大切にせずにくた（大切にしていたつもりだが）結



果であり、家庭の味を一番知っているはずの主人（あえてこの言葉を使用した）は協力的ではなかった。「あいつは勝手に好きでやっている」といつも言い、協力を求めると、「オレはオレのやり方で好きにする」と言われ、だんだんあてにしくなっていた。信頼関係は薄れ、やればやるほど、全てが悪化していった。火中にいると何がどうしてなのかわからない。糸口が見つけられない。夫と話し合っても、どうどうめぐりになり、問題点をすりかえられ、最後にはなすりあい、攻撃しあい、敵対していった。話し合いのできない家族をつくるのに努力していたようだ。ただのガムシヤラのやりすぎ。ものわかりの良い妻のふり、嫉に敵しい母の役割をしていた。そこまで気づいたのなら、もう一度積み直してはどうなのか。元のキャストでは、とてもできないほど全てが傷つき、修復不可能にしまった。そう同じ夢は見られない。悪夢ならなおさら見たくない。

私は目覚め、気がつき、今から一歩踏み始める。心を開放し、だれも束縛せず、だれからも束縛されず、押しつけず、支配せず、穏やかにコミュニケーションをし、つくりあげていく方法を学んで実行していく。

家族とは、個と個の結びつきで最小の社会をつくるものである。それぞれ違った個であることを認め合うことができる人間関係を結ぶことは、（血がつながっていてもいなくても）簡単であるようだが、難しい。家庭の基本は、妻と夫。この関係が家族に影響を与える。妻と夫は親密なる他人であるから人権を認め合い、思いやりながらコミュニケーションできる空間、「そうね」と耳を傾ける距離感覚。ほつとする安らぎと暖かさがある。成長し、変化していくこと

を認め信じ合える人間関係をつくるには……だれかが犠牲を払うのではなく、報告・連絡・相談を、穏やかに風通しよく話し合え、どうしたいということに心を開き、押しつけでなく、提案していく。信頼、敬愛できる関係に明るさと穏やかさ―ほほえみのある家庭。……と書いている時（四月十九日（火）午後十時三十分頃）、突然、子供たちが、なだれこんできた。

「今日から、一緒に暮らします」……

父親——倒産——行方不明。

言葉でユートピアを夢みても、いざ一つ屋根の下に人が集まると、「お母さん、しつこいよ」「声がキャン、キャンしてるよ」と耳をふさがれて、聞きたくない、と表現される。三年半交流のなかった疎外感で落ち込んでいた時、友人から電話。状況を話すと、「平和な家庭で毎日一緒にいても同じよ。三年のブランクでなく、親子という甘えよ」と言われ、ホッとして氣を取り直すありさま。

結婚、家族、離婚というキャリアを持つて、今は子供たちを通して、いずれ、共同子育てができるように話し合えるように努力していく。父母であることは永久に変わらないところから出発し、改めて、新しい親子関係を作り直し、いつの日か、スクランブル家族をも考えていきたい。

私にとつての家族——固定された家族でなく、「個と個が変化成長していくのを信じ合える人間関係」を創っていきたい。

# 夫は私の添加物か

柳澤 つや子

十二、三年前、食品添加物という言葉がしばしば聞かれるようになった頃、私は集合住宅に住んでいた。住宅内のグループ活動や班会などが、いつ、どこで開かれるか、情報はすぐ耳に入ってくる。しかし私にはお誘いがない。でも村八分にされたわけでもない。子どものお友達のお母さんから「あなたには添加物があるから誘うのよすわね」とか、「誘わなかったのよ」とか言われていたので、ちよつぱり疎外感を味わいながら善意に解釈して、「添加物のいる家」へひきこもる。「添加物」すなわち夫である。私立大学に勤める夫は、仕事（研究）は家でするものと決めている。講義やゼミがない日はほとんど家にいる。長い夏休みもずっと家にいる。その上、生活のリズムがきちんと決まっているので、午前中出かけても、正午の昼食時までには帰ってこなくてはならないから気が気でない。結局出かけるのをやめにする。午後はどうかといえは小学生の子どもが帰ってくる。母は家にいるべきと思っているからやはり出かけられない。子どものためならともかく、夫がいるから出られないなんて――。しかし初めから夫は添加物だったというわけではないのです。



私、絶対結婚するの。身障者が結婚できないというきまりや法律はどこにあるつていうの。高校卒業後、偏見と差別で育った故郷を捨てて（？）、多くの人と出会いたい、理解してくれる人にめぐり合いたいと思つて東京へ。四年後大学で夫とめぐり合い、一九六七年念願の結婚ができた。当然のことだが、私の障害である右手の指欠損のことが問題になった。「遺伝するかもしれないから子どもは産まない」と私。「女のほうが避妊手術は大変だから、ぼくが手術しよう」と夫。幾つかの大病院で、遺伝するかしないか診てもらつたけれど、胎内の事故ではないかと、原因不明。ひよつとしたら子どもをもつ可能性があるかもしれないと手術を中止。大学院生だった夫の収入は奨学金のみだったが、私は法人の事務所働いていたので、なんとか六畳一間のアパート生活はできた。ひとりでも働かなければならない、だったらふたりで暮らすほうがいいと思い、夫の就職が決まるまで七年ちかく働いた。貧しさ、就職がいつ決まるかもわからない不安の毎日だったけれど、私にとつて一番輝いていた時ではなかったかと、今振り返つて思う。

夫は友達から「ヒモ」と言われた。「ヒモは仕事をしない、しかしぼくは仕事をしているからヒモではない」と反論。山男だったので家事分担をしてくれる。しかし金銭感覚がないから生活が苦しくなり、結局私がしたほうが楽。それに結婚願望の強かった私は——日本の家族社会は皆婚主義であるから、結婚しないと一人前として見ない傾向にある、身障者だからこそ、そんな風に見られたくない、是が非でも結婚したいと思つたから——何もかもしてあげるのが愛情であり、女的美徳でもあると思ひ込んでいた。果ては就職運動のため、教授へお願いにいく始末。夫は経済的に依存しているという引け目からか、居心地がいいのか、次第に私の添加

物になってしまった。

福岡市内の大学に就職が決まった時、もう私は働かなくてもいい、今まで以上にもつとつと尽くそうと思った。それは高群逸枝の「火の国の女の日記」を読んで、夫である橋本憲三が女性史を研究する高群逸枝のためにすべてを尽くしたとあったから。高群逸枝のように偉大な研究者にはなれない夫だけれど、少しでも研究がしやすいように、いい論文が書けるように、努力しようと心に決めた。

一方夫は、経済的に自立したとたん、「子どもが欲しい、たとえ生まれてくる子が指欠損であつても大事に育てよう」と。そして一年後の一九七五年四月、長男を五体満足で出産、しかし早産で一九九〇グラムの体重。覚悟のうえだったから、うれしい、夢ではないかと、ふたりで大喜びした。私は育児・家事に没頭し、国際婦人年が始まった年であるのに無関係に思えた。沐浴、おむつかえ、散歩と、夫も育児に参加してくれた。

翌年四月名古屋に移る。間もなく「先天性四肢障害児父母の会」を新聞で知り、名古屋大学病院整形外科で右手のことがわかる。病名はボーランド症候群、原因は不明、絶対に遺伝しない。この情報が全国の大学病院にゆきわたっていたら、不安もなく長男を生むことができたのに。

一九七八年十一月に長女を出産。夫優先の生活の中で、家事に、そして楽しませてくれる子育てに専念し、ますます家庭の中にこもっていった。疑いもなく幸福と思い、賢妻、賢母のもりでいた。自己満足にすぎないのに。

八年前、子どもたちに一部屋ずつ与えたいと思い、今の一戸建て住宅に転居。住宅さがし、売買、銀行の借金など、夫に代わってすべてした。今度は何をしよう。子どもはだんだん私を

必要としなくなるので、夫を拘束することに心が向く。大学の送り迎えをしようと自動車の免許を取る。四三歳になつて。

拘束も度を越すと、飲み屋まで平気で不機嫌な顔をして迎えに行くようになってしまふ。当然夫は怒る。家に帰つて夫婦喧嘩をする。労力の無駄だとよくわかつてゐる。だけどどうにもならない。

なぜこんな風になつてしまつたのかしら。夫と子どもを相手に居心地はとてもいい。そして安定した生活にもなつた。しかしいくら幸せだからといつても、社会と直接つながらない家庭の中では輝きもなければ、刺激もなく、ただ悶々としている。孤立していく自分に、夫だけはいつも目を向けていて欲しいと思うから一層拘束していく。「尽くしてあげよう」が、いつの間にか「拘束」に変わつていつた。そうかといつて夫婦でいる時間が長いから、次第に会話にも困るようになる。夫に質問すれば、「こんな事も知らないのか」とか、「言つてゐる事がわからない」とか言われるようになり、ますます会話が乏しくなつていく。くだらないことでもいから話題にしようと、一生懸命になる。疲れてしまふ。この先何十年このままで続いていくのか、これで一生が終わつてしまふのか、本当にこのままでいいのか、と考えるうちに情緒不安定になつてしまつた。

もう拘束することをやめよう、夫を拘束するから自分も拘束されてしまふ、孤立していくのをやめよう、と決めたのは四年ほど前。そう思つて少しづつ「女性の生き方のセミナー」を受講するようになった。暗中模索のうちに一年前「ウイン女性企画」の「結婚整理学セミナー」のスタッフになつて、ほんとうによい仲間とめぐり合うことができた。

外へ飛び出すようになった私を応援してくれるのは子どもたち。決まった時間に食事ができない、送り迎えができないなど、夫は当てがはずれて不機嫌になる。出ることが度重なり、顔をしない。私は自由を拘束されるのがだんだんつらくなる。でもここで頑張らなきゃもとの木阿弥、自分の我を通したい。

「家にいることはいけないことと大学で教育を受けたから、おまえは何がなんでも外へ出ようとしている。しかし俺は今までどおりでいいと思っているよ」と夫は言う。「このままじゃ刺激もなくボケていきそうなの。あなたに迷惑かけたくないの。それに子どもたちはあと五年もすれば出ていくわ。ふたりだけの生活になったとき、あなたの帰りを待つだけの私じやいやだし、なによりもあなたと向き合えるいい関係でいたいもの。それには少しでも社会と直接つながっていたい。だから今は外へ出たい。勉強もしたい」と私は頑張る。「外へ出ておまえが輝いているならいいよ」と夫。こうして徐々に添加物を払いのけようとしている。

しかし一方、仲間の人たちと小旅行をしても、やはり夫のことが気になつてしょうがない。一緒だったらどんなにいいかと思つてしまう。まだ私の中に「いつも夫と共に」という気持ちがまったくぬけきつていない。

添加物がくつついて二六年、払いのけるにはずいぶん時間がかかりそうだ。夫を変えるよりまず自分が変わらなければならぬ。自分との闘いでもある。これから何回も口論すると思う。その都度自分の気持ちを素直に伝えていきたい。もつとたくさんの人と出会いたいし、勉強もいっぱいしたい、少しでも輝けたら、と願っている。でも基本的には、夫が研究に没頭できるように、いい論文を書けるように、健康づくりや環境づくりはしたい。



## 妻は夫を変えられる——私の場合

小泉 明 さやか

妻は夫を変える力がある。

夫は妻を変える必要性がない。

夫は妻が夫のことを思うほど、妻のことを考えていない——結婚後二十年の、妻としての私の感想である。

私は、「自分に行動力がない。勇気がない。自信がない。何もない。弱い人間。ダメな人間」と思い続けて十年間。長かった。

四十代半ばとなった今、振り返ると、二十年前の甘えが自分をダメ人間へと引つ張り込んでいったようだ。「この人なら私一生、何もしなくても樂できるわ。ウツフツ」と、笑みを浮かべての医師との見合い結婚。同時に薬剤師の仕事を辞め、結婚後二、三か月して、そんな世の中甘くはない、と実感した。

三年後、田舎へ引つ越し、姑と同居を始めた。田舎の生活は不安で、私は反対したが、二対一で押し切られた。夫は一人っ子。姑との同居は必然的だと私も思った。姑は長い一人暮らし

から解放されて嬉しかっただろう。それからは、姑にとつても私にとつても気苦労な生活が始まった。次女が生まれ、賑やかな五人家族。子供たちにとつては祖母との生活も悪くはない。夫は世間でいういい人。その上やさしい。姑も頭が低く、そしていい人。そういう二人を見て、私もいい人にならなければ、と思つた。彼らよりもつといい人になろうとさえ心の中で誓つた。いい嫁になろうとも誓つた。

私なら絶対できる、と悲しい自負。

同居してまもなく、些細なことで姑と口論となつた。私は間違つていなかった。姑が実際にない事をさも当然そうに言つた。姑は悪気のある人ではないが、自分に都合のいいように作りの話の上手な人だ。

その時のことは今も鮮明に覚えている。

翌日、夫が午前の忙しい仕事の途中わざわざ家まで戻り、強い口調で私に言つた。「そんなことを言つてると仕事もおちついてできん。いい加減にけんかはやめてくれ」と。その一言で、これからどうやつていけばいいのかを悟つてしまった。私がいけなかつた。悪かつた。はつきり言つてはいけないのだ。姑とうまくやつていくには、そして家の中がいい状態であるためには、ほどほどの受け答えでいいようだ。私は何かを諦めた。

正面向き合つて話し合うべきだったと今にして思う。しかし建前で暮らすようになっていつた。それからは姑とけんかにならないように、自分を極力押さえていくように頑張り通した。夫にあわせ、姑にあわせていくことで自分を失つていった。さらによい嫁を演じることに拍車をかけた。その頃は親しい友人もなかつた。

嫁として嫁いだ者は、私に限らずみんな必死で生きてきた。周りが見え、暗闇の中で手探りで一つ一つかみとつて自分のものにしていくしかない。

まして田舎はいやな所が目について、良い所などみじんも感じられなかった。

子育てとそんな日々が二年ほど続いた。新築そして医院開業。今度は姑と代わり、私が仕事を手伝うことになった。私は働くことに喜びをもった。仕事の仲間との会話を楽しんだ。最初は順調で楽しかった。

やがて仕事のことで夫と口論するようになっていった。何事をするにも姑との会話には「すみません」が入った。

私は二人の娘に伝えよう。

女も男も関係ない。自分の一生の仕事を持ちなさい。そして自立へ。それを自分の自信へとつなげていくべき。でも結婚も考えてほしいし、出産もすばらしいことだと。

セックスについても良い本を読むよう勧めた。夫も私も読み、感動した本。性は命の大切な源なので、性を語ることは大切なこと。そして楽しいこと、と。

仕事のことで夫と話し合う。結論が出ないまま話し合う日々が続く。真剣に話す。お互いにストレスが蓄積されていく。私の思いはすべて夫に伝えるが、夫は酒を飲みに行くわけなし、ストレスをどこで解消するんだろうと感じないわけではない。

姑とは仲がいいように見えていたのか、本当の親子ですかと言われたこともある。夫と話し、でも返事は同じで進展しない。

私はどうにもならない現実に追い込まれていった。仕事の助手として働いている私は、夫の



助手がいやになってしまった。私は今まで、まず夫のことを考えた。夫が人前で恥ずかしくないようにと心を配った。そんなことにも疲れてきた。しかし、生きるため家族でこの仕事を続けるしかない。

ある年の春、桜の散る頃、来年の桜は見られないと思った。今年が最後と思った。仕事後、泣いていた。子供たちに気づかれないように。自殺ということばが浮かんただけではないが、生き抜いていく気力がまるつきりなかった。やがて自分が存在感のないもの、と気づいた。その時期、夫も姑も、困った顔で心配をしてくれるのだが、解決策は何も示してくれなかった。頼れるのは自分だけ。女性問題の本も新聞も読んだ。

夜、時間がある。何かをしよう。必死だ。その横で夫はテレビを見て笑っている。何をしようか。一人で考える。

そうだ。数学が好きだった。数学だけは夜遅くまで勉強した記憶がある。娘と一緒に数学の勉強を始める。結構おもしろい。半年通信教育も受けた。そんな折、図書館で高橋ますみ著『女四十歳の出発』（学陽書房）に出会った。それも偶然数学の本を借りるために足を運んだ時だ。数学の本の間に「私を手にとつて」と言わんばかりの場違いの本が一冊まぎれこんでいた。

名古屋にすごい人がいる。お会いしたい。すぐ訪ねた。

そして（東海BOC）（現在は「ウイン女性企画」）に入会。入会用紙に自己PRの欄がある。えつ、私は驚いた。自分をPRしていいの？ 押さえて生きてきたのに出しちゃっていいの？ 天にも昇るような喜び。私の長所を考えるなんて幸せ。でも果たしてあるの。その時の

新鮮な気持ちを覚えている。そんな日は夫にも姑にもやさしくなれる。

次第に自分の意識改革が始まった。

行動のない人生なんて、太陽のない冬空のようなものだ。

即、行動を起こすようになった。一週間のうち一日休みをもらい、二時間かけて名古屋へ出かけた。田舎から行った私は、小さくなって椅子に掛けていた。でも周りの人の優しいこと。あたたかいこと。活発に議論しあつて刺激をうけた。

こんな生き方があることを初めて知った。私には都会は新鮮で、緊張感があり、自由に羨しく思われた。名古屋から帰つて、夫にその日のことを話した。夫はよく聞いてくれる。自分を出すようになり、周りが違うように見え、ずっと生きやすくなった。片方が生きやすくなれば相手も生きやすくなったようだ。

一緒に成長していきたい、感じることを率直に言いあつて伸びていきたい、と、常々私は夫に話している。

名古屋へ行くことも反対しない。以前、臨教審（臨時教育審議会）の公聴会が名古屋で開かれた時も、私の出席に反対しなかった夫だ。

四、五年前、こんなことがあつた。姑が菓子折をもらつてきたのだが、誰からのいただき物かわからない。おやつ、変だ。それからの姑の記憶は定かでないものがふえてきた。記録力障害とのこと。自分を出さず、人にあわせるから本心がわからない。姑を傷つけないし、かといつて会話が順調に続いていかないことも事実だ。姑とはそんな状態であり、夫との会話がふえていった。

高橋ますみさんに会つて、元氣・行動・勇氣をもらい、また、この地で親友もでき、私は明るい自分を感じている。

こんなにも夫と話しあつてゐる夫婦があるだろうか。朝八時前から夜六時まで一週間、二人で仕事をしている。私が何でも夫に話しかけるから会話が多いのだと思う。彼にしてみれば聞きたくないことも、うんざりすることも、私はかまわず切り込んでいく。それは私たち夫婦は対等の関係で、一つのことに對し、より良い結果を得たいから。二人して協力して仕事を積み上げていきたい。しごく当然のことなのだ。二人して協力して子育てもしていく。夫が食事の準備をすることもある。私は大歓迎だ。煮るのもいためるのもおいしい。

いまあることすべてを自分の尺度でもう一度洗い直してみるこの大切さを、学陽書房の坂田康子さんの講演で聞いた。夫もそうだと頷く。その辺はお互い納得できる。夫は真剣に私と向きあい話をするようになった。

夫は争いを好まず、刺激も行動も好まず、私とは反対のようだ。夫婦である以上、そういう考えもあるのかと思うようになつてきた。私のやることに對し、「才能がないのだから諦めたら。自分を窮地へ追い込んでいくようで、見てて忍びない」と、真剣なそして少しイヤ味な顔で言う。

私は笑いとばしている。かえつて目が輝く。

そう言いながらも夫は塾の問題集の払い込み通知表をのぞいて、「いくらだ。午後早速払つてこいよ」「お金を借りなくちゃならないけど」「いいよ、やるよ」「じゃあ、そうする」などと言つて、結構心配をしてくれている。そんな素直なやさしさ、いたわりはありがたい。



一九九三年七月から、夜、数学塾を開いている。目下生徒は四人だけだが、中学生ともども成長したいと願っている。「自立の夢をかたちに——女ひとりを作る塾」(学陽書房)の著者でもある高橋ますみさんにお教えいただいたことは言うまでもない。ますみさんは、年三回ほど、全国から集まる読者を対象に「塾の開き方セミナー」を開いている。

私の夫へのはたらきかけは、夫と正面で向き合う姿勢を常に私がつて会話し、そして行動することだった。

田舎の良い所が見出せなかった私も、目の高さをちよつと変えただけで住みやすくなった。今は、都会の人に、心が疲れたら休みにおいでよ、三河の山間の村へおいでよ、と明るく声をかけることができる。

暗かった私、自分を出さなかった私。そんな生き方が楽しいはずがない。心から笑えるはずがない。今は言いたい放題。

仕事に協力し、お互いを伸ばしていける、そんな夫婦をめざしている。





# 病んで夫と出会った

西出 敏子

一九九三年、私は、満五〇歳の年を迎えた。元気、明るい、大きな声、がセールスポイントと自己満足し、当たり前のように暮らしていた自分に、一九九三年は大きな転機を与えたのだった。

「肺真菌症」——こんな耳に聞き慣れない言葉、いえ病名が、私の病気だった。簡単に言えば肺にカビができたと言うのだ。二月一六日（なんと夫の誕生日だった）、私は入院した。カゼひとつひいたことがなく、結婚して二八年間、三日と寝ついたことのない私が。

何しろ肺にカビが出来て肺を三分の一切り取る手術なのだ。どうやって肺を切るかと思うと、はつきり言つて怖いのだ。もう私も五〇歳なのだから怖いとは人には言えない。まして心配そうな夫には知られたくない。何としても取り乱さない心がほしい。私は般若心経を日記に書いて寝るようにした。少し心が落ち着いた。般若心経の意味を自分流に一生懸命かみくだき、理解につとめた。自分、「人間」を超えるものを信じること。あるがままの現在を受け入れること。そんなことを思つた時、少しずつ心が落ち着いていった。こんな辛い思いをするの

が自分でよかつた。夫や、義母や、母でなくて、本当によかつたと、そう思うことで心が落ち着いた。

それから毎日、平常心で手術が迎えられることだけを祈つた。こんなに元気なのに手術なんてとても信じられない気持ちだ。夢であつたらと、何度も思つた。早期発見（定期検診のレントゲン）だつたので自覚症状が全然ないのだ。

いよいよ手術の日が明日とせまつた。検査の結果、問題は在りませんので手術しましょうと、やけに明るく、先生はおつしやつた。

今日は、午後から手術の日。夫は病院まで来てくれた。心配そうに、もう胸がいつぱいという顔をしている。私は元気よく、「では行つてくるわ」と、病室をでる。夫は立ち上がり、「頑張つて、大丈夫だよ」と、強く手を握つてくれた。私はナースセンターに行き、鼻にチューブを入れてもらつたり手術着を着たりして用意をした。取り乱さない平常心を一心に願つていた。優しい看護婦さんは、「ご主人に、手術室の入り口まで一緒に行つてもらいましょう」と言つてくださった。私は大急ぎで「いえ、一人で大丈夫」と言う。こんな姿は夫にはみせられない。

手術室に入つてからは、もう私はこのまま目がさめないかもしれないと思つた。私は「夫や母の為には、まだ生きていたいのです。どうぞまだ私が必要だつたら生かしてください」と願つた。

そして、気が付いたのは回復室。もう痛いを通りこして、ただただ苦しい。

「苦しい」と言うと、看護婦さんは痛み止めを打つて下さる。打つてもらつとドーンとして

後はおう、ウツラ、ウツラ……。ウーンこの痛さは半端じゃない。

しかも、帰ってきた回復室を、半日にしてもう一度手術室に入ることになった。「止血が悪いので、もう一度開いて、止血の手術をする」と先生がおっしゃった。さすがに落ち込んだ。しかし、するつきやない。もうろうとしているうちに手術室へ。妹のミコは、オロオロと手術室までついてくる。その時、私は妹に「ミコちゃん大丈夫だからね、心配しないで」と、はっきり言つたとのこと。全然おぼえていない。これは一体どうしたことだろう。誰かが、そう言つてくれたに違いない。そう、人間を超えたものの存在を感じた。

そうして三日間、回復室で過ごした。痛い、ということはずべて味わつたような気がする。その時気が付いた。いや、気が付かせて頂いたのだ。痛いということは、生きていくことなのだ。痛いことは、有り難いことなのだ。

そんな気持ちになると、点滴も、治療のすべては、私に必要な大切なもの、と受け入れる気ができた。痛い嫌がついていても、痛さは消えない。すべて自分のものだから……。

入院生活も悪い事ばかりではない。手術後、十日程たつた日、男性社員二名がお見舞いに来た。

「社長、タバコ止められたんですね」「エーッ、それ誰のこと。うちの社長のこと？」

私は驚いた。三七年間もヘビースモーカーで、一刻も止めることなど想像もしなかった。

翌日、夫に聞いた。「タバコ止めたの」「ウーン止めた」「じゃあ苦しいでしょう、辛いでしょ」「イヤ、ゼンゼン」「じゃあ、いつから止めたの」「手術のあの日から一本も喫つてないよ」……ウーン、私はうなつた。

そういえば、私が入院してからの夫の態度は少し変わったような気がする。病院が会社から

近いとは言え、朝、昼、晩と見舞いに顔を出した。三日前からは、写経を一枚ずつもって来てくれている。もらう写経は、字の書き方で、書いてる様子がわかる。

夜、八時まで病室にいて、帰ってから夕食の支度をして、それから書き始めるのは、十時から十一時頃だろう。眠たそうな字もある。思いがけず丁寧な一枚もある。最初に見舞いにつけた友人が写経を持ってきたのを、夫は見ていたのだ。

そうして私は退院まで毎日写経をもらった。病室では、時々、本も読んでもらった。

私は、病気というアクシデントで、今まで、夢でしか見たことのないような毎日を過ごしている。もし、私が元気で、いつも通りの暮らしてあつたなら、夫のこんな大きな愛を知らずに、思いを知らずにいたに違いない。

しかし、普通の毎日、何もない毎日、平凡な毎日、こんな素晴らしいことはないのだ。しみじみとそう思える。

夫が脱サラをして、そして木綿に出会った。木綿に出会ってから、木綿が一生の仕事になった。

私たちには、子供が恵まれなかった。私は夫について、自分なりに一生懸命、仕事をしてきた。お店が、商品が、一緒に仕事をしてくれる人たちが、私たちの子供だった。それで良いと思っていた。私は、夫に対して、まわりの人たちに対して、傲慢だった、と気がついた。

仕事を一生懸命している。仕事第一の生活をしている。すべての生活に仕事が優先していることで、生活を犠牲にしていることを、あたかも大義名分のごとく、高く掲げていたのだ。

私にとって、一番たいせつなものは何か。かけがえのないものは何か。例えば五人のたいせ

つな人の名前を書いてみて下さいと言われたら、誰の名前が思い浮かぶのだろうか。

一生懸命考えてみた。夫、義母、母、兄弟、姉妹、その子供たち。一緒に仕事をしている人たち。なんでもないことでも話すとホッとする友人……。そうなのだ。一番みじかな人が、毎日、共に暮らしている人が、一番大切でかけがえのない人なのだ。やつとわかった。こんな大切なことが、本当にわかつていなかったのだ。かけがえのない人との付き合いをそろそろにした。一番みじかな夫や、母を、そろそろにした。

私は砂地に水がしみこむように、しみじみとわかった。今まで、気がつかなかったけれど、心の中でモヤモヤしていた乾いた心が、寂しさが、とけていくような、心ゆたかな気持ちになった。

永いこと一緒に暮らしていても、一緒にいるだけではダメなのだ。どれだけ共有体験が持てるか、同じ言葉で話しているか、気持ちを通い合わせているか、ということなのだ。毎日の生活の中で作りだしていきたい。生活は、小さな積み重ねの連続なのだから。

私は、少しずつ実行してみた。まず、夫は毎朝、犬の散歩をしている。私は、一緒に行くことにした。初めは、五〇代の夫婦と一緒に家を出て近所を歩くのが気はすかしかった。が、特に何も話さなくてもよいのだ。一緒に道を歩く。「角の家のバラが咲いていた」とか、「あそここの家のゲン（犬の名前）が、子犬だったのに、もう大きくなつたね」とか、「今年は、すずきが少なくて、せいだかあわだち草の黄色が目立つね」とか、何ということもなく散歩をするのだ。私は、日曜日の散歩は少しゆつくりできるのでカメラを持っていった。夫は双眼鏡など持ち出して、バードウォッチングと言つて公園で見たりしていた。カメラで見える世界はまた違

つた。よく物を見るようになった。道端の小さな草花も、よく見ると花の形も花卉の数も、一つ一つ違った。そんなちいさな楽しみが少しずつ増えた。一年も季節ごとに写真をとっていると、だんだん夫との会話も、春には、「もう、あの道のれんぎょうの蕾がきいろくなつたよ」とか、「あの原っぱの赤い葉が大きくなつたね」と、話もおだやかで通じようになる。花や、草や、木の名前にあまり興味がなかった夫が、散歩の帰りに、「こんな花があつたよ」と、一枝の草花を私にくれたりすると、夫つて、こんな優しい感性があるのだと、心豊かな朝だつたりする。

やつぱり、私が独り言で、こんな所に可愛い草があるよとか、このドングリ面白いねとか言っているのを、聞いてくれていたんだ。「相手は鏡、写っているのは自分」と、よく言うけど、小さなことなのに私は嬉しい。心豊かに見えるようなことが、だんだん一つになつて行くんだ。少しずつ生活が、一日に一言の会話が、同じ言葉になる。同じ価値観で笑える。

あのまんま、一番大切なことに気が付かず、私は私、あなたはあなた、という生活が続けていたら、毎日小さな過ちを続けていたら、取り返しつかない大きな過ちとなつて、砂漠のような夫婦となつて年老いていったらう。

あ、うん、の呼吸。何も言わなくてもわかりあえることなどないのだ。あつても、ほんの少しの数少ないカケなのだ。うれしいときは素直にありがとうを言わなければ、相手に通じない。一番かけがえのない人に、いつも、ありがとう、と言える暮らしをしていきたい。

ああ……でくのぼうになりたい と言つた宮沢賢治つて、すごーい。当たり前のことが普通にできる私になりたい。になりたい。



## 母と子の関係——そして家族のような人々

奥村 典子

母と子の関係について書いてみないかと言われて、少々頭を悩ませている。実は、先日も私は母と喧嘩したばかりである。言いたいことは、山ほどある。が、詰まるところ、あなたはなぜ、こんなにも私を理解しようとしなかったのかという怒りのようにも思える。私にしても、自分に自信があり、他の人から何を言われてもハアハアとながしておけばいい。しかし、私は人の意見にゆらぐ。自分が志向するライフスタイルと現在の状態には、多くのギャップがある。自分自身の非現実な夢をつかれるので、人からアドバイスしてもらった際に、「そう言われればそうかもしれない」と思う。しかも多くの人に聞くので、ますます混乱する。やめとけばいいのに母にも尋ねる。すると、そのアドバイスだけは、何か間違っている気がし、いつたいこれまで、人生の重大な局面で、この人に相談して、正しい方向に向いたことがあったのだろうか、つくづく思いあぐねるのである。

これに対する答えは簡単。聞かずに、自分で考えればいい。しかし、身近にいたので、つい聞いてしまう。このように立場も考え方も違う相手に相談することこそ間違いなのに、なぜか、親というだけで相談してしまうのだ。たぶん、私のなかに「親」に対する幻想がまだ消し

去られていないのだろう。

ところで、私のほうは母を理解しようとしているかといえば、否。私と母は、相性の良くない、考え方の違う親子だ。それだけに、母について何かを書こうとすると、私自身は冷静に分析しているつもりでも、母からするとかなり感情的で批判的なものだと思われがちなのになつてしまう。

こういった「関係」の文章は、やはり、一方だけのものはフェアでないと感じる。私自身のなかには、いまだに母に対する甘えや怒りが無意識にもひそんでいるように思う。母自身にも、私に対する複雑な気持ちがあるようだ。彼女はそれを表現しようとは思っていないけれど。

たとえば、私がほしかったものは、竹の皮にでも包まれた、ただのあたたかいオニギリを多くの人と食べることであったのに、母が与えようとしたものは、よそから見ても遜色のないこぎれいな器に入った赤いカマボコをきちんと食べることであった、というような食い違いが、ずっと続いてきたのだと思う。そして、そういったことの数々は、彼女の育ってきた環境や、女性はあるべきという規範でがんじがらめにされた社会や、敗戦をはさんで価値観が激変した「時代」に、大きく影響されたものだったということは想像できる。ただ、感情的にそれを完全に割り切ることができず、私は、母が世間的な母の「役割」で自分を正当化し、そこから一歩も出ないこと、自分の価値観でしか私を判断しなかったことは、ある種の「支配」ではなかったのかと考えている。

私は、現在、親と暮らしながら、再度、日々の生活のなかで、私たちのこれまでの関係をとりえなおして。私のほうも、母と自分について語るには、母の意識のなかで「青春を奪わ

れた」というあの戦争が彼女に及ぼした影響や、物が不足していた時代から一気に物質があふれるようになった急激な変化を通つた世代、といった社会的背景、そして、農地解放で没落した地主の娘という母の幼いころの環境、それに追い討ちをかけた母の父の死、村社会での母たちの扱われ方など含め、母自身の人生を、もう少し理解しないといけないだろう。

目立つこと、人と違うことが、「悪いこと」で、母子家庭という環境だけで身をひそめるように育つてきた子供時代。「主婦」となり、普通の幸せを手に入れながらも、それだけではおさまりきれないものを日常生活のなかで抱えていた母。女であること、経済力のないことに、たぶん、ずいぶんくやしい思いをしたことも多かつたらう。

私はこのことについて、まだ整理しきれていない。特に、現在は、母から受けてきたものを、今のところ、否定的にとらえる側面が強い。それは、「社会からつくられた女性」「波風たえず周りとうまくやっていくことが一番だ」という価値観に、私自身が、結婚せず子供を産んだ者としてたかつていかなばならないからだ。

私は社会が母に与えた規範が母自身を幸せにしたかという、そうでない部分もかなり多かつたように思う。針仕事の才能を、子供の持ち物や洋服にしか生かさず、しかも、それがめだつものだったため子供の私はそれがいやだったという悪循環。キルトをながめながら、「もう、こんな細かい仕事はできないけど、もうちよつとこういうものが早くあつたら」と、ため息をつく母に、私はこの人はそれをする力が十分あつたのに、と思う。そうして自己表現したらよかつたらう、と思う。彼女は自我を封じ込め、無意識のうちにそれに苦しみ、子育てにも投影させてきたように思う。

私は、彼女を形づくった「社会」や「時代」を深く考えることなく、あなたはなぜ、私を理解しようしないのかと怒っている。「形」にこだわって、私は本当に大きなものを失った。あなたも、もう「形」を捨てたり、組み替えたりしたらどうなのかと怒る。私には親を否定的にみる段階が必要なのだろう、と今のところ思っている。それは「妻」や「嫁」はこうあらねばという役割を、心から素直にはなく、世間や周りの目という、自分以外のもののためにつとめてきた「欺瞞」や「偽善」に、私がうんざりしてしまうからだ。私は、彼女が内に持つていた、その葛藤やあきらめ、表現されないままの激しさを、敏感にかぎとり、大きくなつてきたよう思う。それだけに、私は自分のバランス感覚は、これまで、そんなに良くなかつたと感じていた。自分がしたいと思つたことを貫く力が、まだまだ弱い。かといって、この現状を受け入れて、静かに生きていくこともできそうにない。

この停滞した現状のなかで、私は何か自分が変われるような、外からの刺激を待つてゐる。そのひとつの形としてあつたのが、つい先日、自宅出産をした友人たちの姿だつた。

そこは鄙びた山間地の一画で、彼女は自宅で友人の助けを借りて出産をした。私は連絡を受け、深夜、車をとばした。灯りは、車のヘッドライトのみ。久しぶりに「闇」という言葉を思い返す。都会のネオンきらめく場より、こつちのほうが本来の姿だと、守られた「車という空間」の中で思う。ヘッドライトの灯りに、小動物が、おしりを見せ、駆けて行く。ほんの一瞬の他の動物とのすれ違いに、この山の中で棲息している動物がいることに気づく。

私が彼女の家に着いた時は、彼女はすでに分娩を終え、生まれたばかりの赤ちゃんといふとん

にくるまつていた。古い農家の一室でかほそい赤ん坊の泣き声がし、障子には回りの光をささげるためにやわらかい布がかけてある。

その隣の奥の部屋で、私たちは、薪ストーブを囲んで深夜お茶を飲んだ。お産婆さんの勉強をしているアメリカ人の女性のパートナーの、指圧師の日本人男性と、お産をした友達のパートナーに、私。戸をへだてた向こうの部屋からは、お産婆さん役をつとめた女性がその疲れからか、寝返りをしている音が聞こえる。指圧師の人と私は初対面で、その緊張をはらんだ空気が、薪を燃やしてのぼる蒸気に解きほぐされていく。お産から数時間が過ぎたせいか、彼らはさしたる興奮もみせず、今日、ここにでてきた命を、とても自然に受け止めているように見えた。わたしたちは、地球の波動や、宇宙のエネルギーの話をした。それは、この場を遠いままざしで見つめるような話だった。

「ねえ、胎盤はどうしたの」

「冷凍してあるんだって」

「動物とかは胎盤食べるんだよね」

「前の子のときは、カレーに入れて友達よんで食べたな。今度どうしよう。あれつて体にいいのかな」

「みんな、気持ち悪ーつとか言いながら、けつこう、食べてたよ」

「うへー。胎盤つて骨だっけ？」

「違う、違う、内臓だよ。だから、ちよつと、臭みがあるんだよね」

止血剤も打たず、子宮にいいというハーブティーを飲んで、お産後の彼女の部屋で、私

たちはそんな話もして、とても、たくさん笑った。そして、たくさんのお音を聞いた。

その日一日に起きたことが、そこで少しまとまりをみせたようだった。私は、その日の午前中、高い吹き抜けのある、ゆつたりした空間のホテルのロビーで、ある方から、年若いお子さんを病気でなくされたという話を聞き、その後、<sup>ゴウ</sup>ウォーターというエネルギーが入った水の話聞き、ここへ来たのだった。「まがいものの健康食品で、荒稼ぎしようとしちゃってー」などと、批判的にみていたのに、ここではそれを「そうだろうね」と信奉する人がいる。そして、「生と死がつながっているんだよね」という彼らの一言が、私の一日のできごとをまとめる。私には「生と死」がつながっているという実感はまだないけれど、笑うのと泣くのは波のようにつながっているという実感は、はつきりある。「生と死」というのも、こんなうねりなのだろうか。

あまりにも、現実的に過ぎていく日々のなかで、私は違う「価値観」のなかに入り込む心地よさを感じる。静かで、穏やかで、まったく、時計の針を見ない空間。誰が何をするか決めることなく、お菓子をつくってみようかなという人がクッキーを作り、ゴミを燃やそうという人が、五右衛門風呂の釜で燃やすという具合に、日が流れていく。お産の手伝いという名目で出かけたはずなのに、疲れることなく、なんだかリラックスして過ごす。そして、私は私が一緒に過ごした人々を思つて、ちよつとしたホームシックになった。

「よし、今日は温泉に行こう」

京都の指圧師の彼が声をかけ、四人の子供たちが準備を始める。生まれたての赤ちゃんとその

の親の三人をのこして、私たちは、一台のヴァンに乗り込んで、山道を走る。

「うわー、見て、見て、夕日がきれい」

本立のなかの赤紫に染まった太陽を見て、皆が歓声をあげる。京都から来た彼らの家族とお産をした友人の家族は、かつて一緒に住んでいた人たちだ。その二家族の親しさのなかに入れたらうと、私はオーストラリアと一緒に暮らした家族のことを思わずにはいられない。法律的にはまったく関係のない人々。それでも、友人とよぶには、少し遠すぎ、私にとって彼らを指す一番近い言葉は、やはり、もう、「家族のような人々」だ。

私たちもこうして、歓声をあげて、よく、ドライブした。そして、彼らは、私が選び取った「家族」なのだ。

風呂から上がって、缶ジュースをほしがる子供たちに、指圧師が三か月のもう一人の子を抱きながら、声をあげる。

「よし、大盤振舞するぞ！」

「うわーい」飛び上がる子供たち。

「四人で一本だ！」

「えーっ」

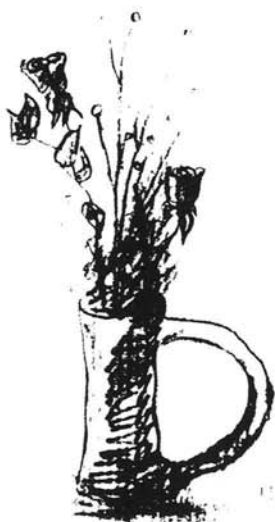
と、がやがや一本のジュースを回し飲みする子供たち。帰りの道中、セブンイレブンの灯を「ラスベガスみたいだねえ」というほど、明る過ぎない灯の中で暮らしている彼ら。「不思議で楽しい」三日間だった。彼女、彼らを通して、私は、自分の思う暮らしをとりもどしたいとい



う気持ちちが自分のなかに強くなっている。自分のなかにある、ある種、原始的な感覚。それを私はもつと活かしたいと思うようになっていく。草や火や空気や水、そういつた自分を取りまくものが、もつと自分にくつきりとせまってくるような暮らし。私は、また、新しい幻想を追っているのだろうか。思いを現実に変える力。それが、今の暮らしのなかで、私には欠けている。

生け花がきちんといけられた、こぎれいな玄関にもどり、私は、また、今自分がいる現実のなかに戻る。

母との関係は、あいかわらずだ。ただ、平行線をたどりながらも、少しずつ、ましにはなっていないのかもしれない。「かかわり合う」ことを放棄はせずに、いるのだから。





## 北欧の家族

吉川 富士子

私は八年前より障害児と健常児のふれ合いの場を提供する、おもちゃ図書館というボランティア活動をしていて、いつかおもちゃ図書館の発祥の地、スウェーデンに行きたいと思っていた。昨年の五月頃、新聞に名古屋市女性企画室が、海外女性派遣団員を募集している記事が目にとまった。訪問国はスウェーデンとデンマーク。団長の愛知淑徳大学助教の國信潤子さんは、アジアの女性と開発の専門家で、この三月、名古屋市の女性グループが開催した「女のまつり」のシンポジウムで、家庭内の役割分担をなくすには、主婦が三か月以上の海外ボランティアをすればなくなると発言した。私の場合、十日ではやはり無理だった。帰ってからはおさら妻、母、嫁の役割期待が大きくなったように思うが、北欧で学んだことは大きかった。

### スウェーデンは結婚と同棲がほぼ同数

北欧の家族について、この旅にかかわって私が知ったことを述べたい。

事前研修で、スウェーデンでは結婚する人が半分くらいと聞いて驚いた。同棲しているのをサンボと呼ぶが、結婚とサンボが同じくらい。子どもができて結婚しないケースも多く、子どもにとつては、親が結婚していてもしていなくても、法的には何ら差別はないそうだ。結婚は、何年も一緒に暮らし、相手のことをよく知り、これからも永遠に愛しあうというロマンのためにすると聞いた。

しかし離婚率も高いそうだ。たとえ離婚・別居になつても、生活に不安はない。養育費は義務であるのできちんと支払われる。もし父親が養育費を支払わない時は給料から天引きされたり、国が立て替えたりもする。児童手当は、すべての子どもに支給されるし（三人目からは一・五倍）、住宅手当もあり、教育費や給食費は無料である。

女性も約八〇％が就労し、税金も夫婦合算性ではなく個人独立徴収制で、女性の経済的自立が進んでいる。家で子どもをみる人がいなくても、保育園、保育ママ制度などがあり、安心して働くことができる。保育ママ制度とは、国から審査を受けて、家庭でよその子どもを保育する制度で、自分の子を一緒にみることもできる。そして国から給与が得られる。なんて合理的なんだろうと思う。

スウェーデンの人口は八百七十万で、名古屋市の人口の四倍ほど。そのうち移民が一割という。日本では出生率一・五三シヨックが騒がれているが、スウェーデンでは二・一四に上昇したという。その理由には、先ほど述べた女性の経済的自立と、子どもを育てやすい環境や諸制度の充実があげられる。いわば子どもを社会の子どもとして受け入れ育てているわけである。

## 父親にも「出産休暇」

育てやすい制度としては、両親休暇がある。これはスウェーデンが世界で初めて作った制度で、十五か月間あり、両親のどちらが取ってもよく、十二か月間は給与の九〇%、三か月間は一日六〇クローネ支給される（一クローネ約十五円）。子どもが八歳まで分割して取ってもよい。父親は四〇%ほど取っているという。（両親のどちらでも取れる育児休暇は日本にもできなかったが、期限は一年で無給なので、父親が取ると新聞にのるほど父親の利用はわずかである。）

次に父親の十日間の出産休暇。有給で給与の九〇%が支給される。もし、仕事だからと言って病院に来ない場合には、看護婦が仕事先に電話をかけ、「仕事をする人の代わりはいても、父親の代わりはないから、すぐ来るように」と呼ぶという。父親が出産から子どもに関わると、子育てにも協力的になるし、たとえ離婚しても、子どもの父親としてつながりを持ち続けることができるという。これは離婚率の高いスウェーデンにおいて労働者確保の政策とも言える。なぜなら、離婚をしてアルコール中毒などになり働けなくなる男性が多く、同じ離婚をしても、きちんと働きつづけている男性は子どもとつながりがあるという報告があつたからだという。

ほかに子どもの病気の時の介護休暇もある。これも有給で、年間九〇日もある。スウェーデンの子どもは平均して五日ぐらい病気になるという。

## 電車やレストランの中にも子どもの遊び場が

またパートで働く権利が保障されている。日本のパートとは内容が違い、今は、単に働く時間が短いだけでいずれフルタイムで働くという条件のもとで働くので、フルタイムと単位時間あたりの賃金や休暇の権利・保険・年金などが同じである。両親は子どもが五歳になるまで労働時間を短縮できる。

子どもたちの遊びの場も保障されている。公園も多いが、電車の中に子どもが遊ぶ場があるし、マンションの共同の洗濯場にも子ども用のテーブルと椅子にままごとなどがあり、広いスペースが取つてあつた。レストランにも積木やブロックで遊べるようになっていて丸いテーブルが用意してあり、子どもたちは静かに遊んでいた。ホームステイ先の家の中にも小さい子どもが入って遊べるハウスやテントまでがあつた。

スウェーデンの家族構成は、親と十八歳未満の子どもが多い。子どもは高校を卒業すると、独立をする。高校の卒業式が日本の成人式に当たるようで、卒業式には地域の人たちも集まり、お祭り騒ぎになるといふ。

大学へ進学する子どもは少ないらしいが、親元からは通わない。アパートを借り、自炊する。そして親からお金の援助も受けないようだ。教育費は無料で、アパートは国から学生の住宅手当があり、生活費には学生ローンを借り、就職してから返済する仕組みになっている。大学は、社会人になつてからキャリアアップのためにはいる人も多く、学生の平均年齢は高いといふ。大学が、働いてきたことをキャリアとして認めるということもある。

## 人を愛することは大切。だからフリーセックス

フリーセックスについても私たちが持っているイメージとは随分と違うようだ。

スウェーデンの男性が名古屋の「中部日本スウェーデン協会」の会報誌にこう書いている。

「スウェーデンでは一九六四年に経口避妊薬の販売が認められた。一九六九年に義務教育過程において、両性の地位の平等を奨励する新しい指導要領が導入された。一九七五年に十五歳以上の自由な中絶が認められた。一九七六年に女性が妊娠十六週間までの中絶をする権利を得た。しかしそのほかに、スウェーデンの女の子男の子は、自分の体については、性の問題に関しても、自分で決定する権利を持っています。社会的には十八歳でようやく成人となりますが、身体的事柄については十五歳で大人となるのです。だから妊娠した十五歳以上の少女は、法律によれば、両親の考えや意見に関係なく、子どもを産む権利があるわけです。その少女はまた、スウェーデンで行われている自由な中絶をする権利もあり、その際には両親に何も告げる必要はありません。少女と医師の間の秘密事項となるのです。この時期以後、考え方がリベラルになり、法律もそれにつれて変化しました。だから八〇年代には登録された妊娠とともに、中絶数もすばやく増加しました。

しかしフリーセックスとは、誰とでもセックスすることではありません。異性と性的な関係を持つ人が、自らの人生と体について自由であるためのより多くの権利を持つことなのです。例えば一九八二年にスウェーデンでは、ポルノグラフィックなライブ・ショウの上演や、未成年者の載ったポルノの販売が禁止されました。スウェーデンのフリーセックスとは、つまり、

共同生活者たちが、婚約者たちが、また恋人たちが、性の問題に関して、国家や親戚の介入なしに多くの自由を持つということなのです。それは今日の日本人の欲するところでもあるでしょう」

私はスウェーデンに留学している高校生の女の子に、その事を聞いてみた。

「フリーセックスについてですが、本当ですよ。ショックでしょうが。私も初めはびっくりしました。でも実際男女で家に泊まつても、しじゅうセックスばかりしているわけではなくて、同じベッドで抱きあつてキスをして横になっていることも多いみたいです。十五歳の私の妹（ホームステイ先の家族）の彼もよく泊まつてます。とにかく人を愛することをいけないことだとまったく思っていないので、それと同じく愛し合っているもの同士のセックスは自然だという考えなのでしょう」

### あらゆる意味の平等を目指して

ところで、海外派遣団の訪問先に「SIDA」（スウェーデン国際開発機構）があり、スウェーデンが第三世界への援助を、女性の視点を生かして惜しみなく実施しているのを知った。そして私たちが行なったアンケートにも、第三世界への援助は当たり前のことと答え、一般の人もなんらかの教育を受け、援助に協力参加していた。

スウェーデンでは移民もたくさん受け入れているが、第三世界の子どもたちを養子に迎えている人たちもいた。養子の子どもたちも法的に差別はなく、実子がいても肌の色の違う子ども



も育てるという姿があつた。中部日本スウェーデン協会の会員の人が、「スウェーデンは大好きだがどうしてもそこところが分からない。ある時、実子と養子を育てているスウェーデンの人に、もし二人の子どもが同時に溺れたらどちらから助けるのかと聞いたところ、近くの子どもから、と答えられ、驚いた」と言う。私たち日本人が視野が狭いのではないかと思つた。

また他の訪問先に、昨年の秋に結党したばかりの〈女性党〉があつた。女性の地位世界第一位のスウェーデンで、まだ政治に女性の視点が足りないと言つて活動していた。スウェーデンにおいても男女差別はあり、それは平等になればなるほど見えて来ると言つていた。女性党のパンフレットに、「女性は虐待され、レイプされている。二十分毎に女性が虐待され、一週間に一人の女性が同棲相手か夫によつて虐待され死んでいる」と書かれていて驚いたのだが、この数字は私たちのシェルターから来ているという。スウェーデンの女性たちが手にした平等は、まだ完成ではなく、私たちの先達者なのである。私がホームステイしたお宅は、妻が日本人で、最初の手紙にこう書いてあつた。「スウェーデンをまねるのではなく、批判的にかつ建設的にみて欲しい」と。

## デンマークの「主婦」は既婚女性の五パーセントだけ

一方、デンマークでは少し事情が違つていた。コペンハーゲンの〈デンマーク女性ジェンダー情報センター〉で司書の方からデンマークの女性について話を聞いた。デンマークでは「専業主婦」という概念がなくなり、主婦はわずか五%、今その主婦業に給料を払うべきかと論争

デンマークのファミリー数 1992  
(Danmarks Statistik)

家族の形態		家族の数
シングル女性、子なし		七〇〇、三〇三
シングル女性、子あり		一〇二、三二七
シングル男性、子なし		六九七、三二二
シングル男性、子あり		一五、七四五
夫婦、子なし		五八六、二一八
夫婦、子あり		四三〇、二一六
同性カップル、子なし		八一〇
同性カップル、子あり		四一
同棲カップル、子なし		一、七八九
同棲カップル、子あり		八一、五九八
同棲カップル、連れ子なし		一五三、三九二
同棲カップル、連れ子あり		二一、四二二
18歳以下で親と別居		一四、五五〇
ファミリー総数		二、八一五、七二三

されているという。若い女性はフルタイムで働き、四十歳以上はパートタイム（フルタイムと同じ権利がある）で働く人が多い。

またファミリーの定義が多様化し、ファミリー総数の半分以上にあたる百五十万人がシングルファミリーである（表を参照）。「シングル」とは、母子家庭や父子家庭を含み、離婚して一人で子どもを育てている人も多い。子どもが一、二歳になり家事が増えているのに、男性が手伝わないと、「独りで育てたほうがいい」と、女性が離婚を選ぶそう。

「同性カップル」もある。同性同士の同棲を登録しているホモセクシュアルの人々で、夫婦と同じ権利、義務がある。

デンマークにおいても税制は個人単位で、これは女も男も一人の人間として自分を養い、子供を養う能力がある、という前提があるからと説明を受けた。説明をしてくれた司書の方は、自分はレズビアンで、パートナーが子供を産みたがっているので、人工受精ができるように活動していると言われた。アンケートによれば、すでに第三世界の女の子を養女にして育てている人も多い。団員の一人が子どもにどのような性教育をしているかと尋ねたら、「好きな人ができるまで待ちなさいと言っている」と言われた。

また、表紙に妊婦が裸体で怒りを表している雑誌や、男性の裸体が並んでいる本を見つけたので、ポルノ規制は、と聞いたところ、「デンマークにはポルノも喫煙も規制がない。あるのは銃と麻薬だけ。ただし反対する自由や権利もあるから、自由はすばらしい」と言われた。

デンマークでは男性が産休を5%しか取っていないので、強制的にでも取らせようという議論をしているという。男性が育児をもつとすれば、子どもに対する愛情や責任も増し、職場も変わるだろうからと。

しかしデンマークでも男性の暴力は問題になっている。デンマークの女性に相手にされない男性がアジアへ女性を買いに行き、本国へ連れてきて暴力を振るうという。日本においても同じ状況があるわけだが、男性の暴力に憤りを感じずにはられない。

私がわずか十日間の訪問で得た家族についての報告をまとめた。男女平等と言われる北欧においてさえ、歴史の中で女性は闘っている。私たちは北欧に学びながら真の男女平等を目指していきたい。そこに初めて新しい家族の姿があると思う。

〔新連載〕

# 伊丹十三の ポストモダン映画 I

プリンドル玉枝

## 差異性が併存する体系——ポストモダン

ノーベル賞受賞者オクタヴィオ・パス（Octavio Paz）は、ポストモダンを「計ることのできない時間」とか、「純粹な時間」とか呼び、「一瞬が同時に他の時を示す窓口となる時」（Paz 1992, p.8）と説明している。ポストモダン（postmodern）と言うと、モダン（modern）の後に来る時という歴史的観念から脱けることができないので、パスはあえてこの用語を避けて、瞬間と普遍とを同時に表せる独自の言葉を造りだしたのである。

ポストモダンという言葉は、そもそもフランススワーズ・リオタード（Francois Lyotard）が一九八〇年代に定着させた用語で、「モダンを超越した」という意味で使ったらしい（Lyotard, 1993, p.48）。評論家フレドリック・ジェームソン（Fredric Jameson）もポストモダンという言葉をそのまま使いながら、パスと同じように「多様にして、しかも相互関係を持つ要素が共存している状態」（Jameson, 1993, p.64）と定義している。また、女性学の観点からポスト

モダンを研究したスーザン・ヘクマン (Susan Hekman) も、「一つの観念で真実を説明することが許されないような、多義的狀態」(Hekman, p.4) と言う。一九六〇年頃から、目的主義的なモダニズムに背を向けて育ち始めたポストモダニズムは八〇年に入ってますます多様化している。

日本では、哲学者梅原猛が、日本文化は昔からずっとポストモダンだったと主張し、それは日本人が人間を「人の間」と呼んだり、人生哲学を輪廻という循環組織として説明したりしてきたことからわかるという (Umezahara, II)。要するに、日本人は元来個を全体から隔離して視ることをしない民族だということだ。カリフォルニア州立サンディエゴ大学の日本文学教授三好正雄も、日本の小説が根本的に西洋的「個」、あるいは「私」の観念を欠いている点で最初からポストモダンだったと言及している (Miyoshi, p.540)。梅原も三好も、日本文化の特性をよくとらえていると言えないでもないが、一般市民の立場から視ると、ポストモダン嗜好が社会の各層に浸透したのは、一九七〇年半ばすぎではなかったろうか。金井淑子も「ポストモダン・フェミニズム」の中で、「日本のリブの初発のエネルギ―は一九七五年から始まった国連婦人年で転機を迎えた」(金井, p.25) と述べている。産業の発達、生活の合理化が主婦たちを封建的家事労働から解放し、男「貨幣物神の体现者」という伝統的方程式を破り、国民全体がいわゆる上野千鶴子の言う「平等主義的な差異の体系」——つまり、基本的に身分の平等な者が個性を差異として表現する——を楽しむようになるには、戦後四半世紀かかった。このポストモダンの社会では、衣服をはじめとする各種の私有物が階級の差異を示すバロメーターから、好みの違いを表現する道具と化した。私はこれらの定義をまとめて、ポストモダンを「差異性が

併存する体系」と定義したい。さらに映画評論家ドナルド桐原 (Donald Kilihara) の用語を借りて比喩的に言うと、目的主義的ファビュラ (話の筋 fabula) より様式的スュゼ (表現法 syuzhet) のほうが問題になる瞬間とも言える。

こうした、日本のポストモダンの環境から必然的に発芽したのが伊丹十三の一九八〇年代の映画である。伊丹十三自身次のように述べている。

日本ほど金持ちと貧乏人の差、資本家と労働者の差、あるいは都会と田舎、大人と子供、等々の間の差のない国はないと思う。今やそのような差はほとんど食いつくされて、その結果、企業は差異そのものを創造して、それを売らねばならぬという時代ですよね。いわば日本という国は、資本主義を極度に押し進めた結果、逆の方向から社会主義を達成しつつあるのではないか、という気がしたわけです。(伊丹 p14)

この論文では、この観点、つまり伊丹の一九八〇年代の映画がポストモダンであるという観点から、彼の作品、「お葬式」(一九八四年)、「タンポポ」(一九八六年)、および「マルサの女」(一九八七年)を分析してみる。

## 『お葬式』におけるポストモダン性

強力な資本主義は日本の階級制を崩壊し、新世代にある種の文化的虚無感を覚えさせ、マスコミに溺れる受動的人間を作り上げた。この半昏睡状態の観衆の頭脳に何かを訴える方法をま

さぐりながら、伊丹は風刺（パロディ）の重要性に気づいた。今や、笑いは、他人に気兼ねなくできる自然行為であるばかりではなく、ポストモダンの頭脳に刺激を与える必要条件なのだ。

こう気づいたのは一九八四年、伊丹が五十一歳の時だった。この発見の産物が伊丹の処女作「お葬式」だった。「お葬式」は、伊丹の現在の妻宮本信子の父の死からヒントを得た作品である。架空の主人公井上千鶴子の父、雨宮真吉の死、通夜、葬式の三日を、伊丹の伊豆の別荘を舞台に撮影しており、全体がポストモダンの雰囲気ですべて漂っている。主人公夫婦は、通夜、葬式に守らなければならない伝統的習慣をほとんど何も知らない。核化された家族がそれぞれ別居しているから、伝統とか習慣とかを次の世代に伝える暇が無かったようだ。皮肉なことに、千鶴子の母親は、娘夫婦のこの文化的無知をかえって気安く感じる。堅い親戚の世話になるより、いい加減な若夫婦に頼んだほうが世話がない。任された夫婦は、ひとまず「葬式入門」のビデオテープで葬式用の外交儀礼を勉強し、中でも一番簡単な接待の仕方を選んでいく。「ああ、あれ簡単ね、私、あれにするわ」といった具合に。遺体をお棺に入れて病院から持ち出すか、ふとんのまま運ぶかといった種類の、どちらでもいい場合には、決まって手がかからない方を選ぶ。雨宮家の属するお寺（戒律の厳しい真言宗）が近所にないから、（念仏さえすれば成仏できると教える）浄土宗で間に合わせる。

万事ある程度まで形式をふみながらも、臨機応変に手際よく片づけるやり方は、形式の枠の中で個性を生かした、いわば差異性の併存体系である。ほかにも例がある。千鶴子が葬式に紋付きを着て出るかと思えば、喪主の母親は質素な黒のワンピースにカーデガン、頭にスカーフ

をかぶっている。葬儀屋はフランス製のベレー帽に派手な白黒の革靴、そうかと思えば、坊さんは中世そのままの金ピカの衣装をつけている。真吉の兄、正吉は遺骨を置く方位を気にするが、他の者はどこ吹く風、正吉が思案している間、奥さん方や、子供たちは、雨に濡れたといつてキヤーキヤー騒いでいる。ポストモダンの時代に族長制度も宗教制も形式のみ。形式／様式は、表面的にしか扱われていないから、根本的矛盾をきたさない。

## ファビュラの重大性を紛らす演出

様式的差異（スュゼ）で目的主義的差異そのもの（ファビュラ）の重大性を紛らわそうと、伊丹は演出を凝らす。千鶴子と佗助の車のワイパーからして、二人の顔を見せたり隠したりしながら、煩わしく左右にパタパタ動く。これに、ステレオに合わせて変わる多色のネオンライトが車体に反射して忙しさにハッパをかける。母親から電話で父の死を知らされる時にも、千鶴子はテレビスタジオの電線の迷路を飛び越えて電話に出なければならぬ。着物を脱ぐときは彼女の体の方が目まぐるしくクルクル回る。そうかと思うと、彼女と佗助が演じるコマースヤルは、芸者の方が客より何倍も大きいときている。男尊女卑もどこ吹く風。こうなつたらもう、観客は断片的スュゼに気を取られて、話の筋などどうでもよくなつてしまう。

青木という登場人物が撮った白黒のビデオフィルムに至つては、もう完全に時間感覚を混乱させてしまう。もともと無声・無色だから、内容が古ぼけて見える。ファビュラの順序としては逆転していないのに、どうしてもこの部分が昔の話のような感じを与える。その中に出てく

る人びとも、カメラを意識して、こちらに向かつて手を振ったり、笑いかけたりするから、葬式というよりむしろお祭りのように楽しそう。死者はもうすっかりお棺の中の人になりきって、ひっそり忘れられたように、賑やかな人びとの後ろの方に置いてある。そして死者だけではないく、登場人物の心理らしきものが、おおよそ無視されて、「平穩さ」とか「のどかさ」とかいった種類の全体的雰囲気であとめられてしまう。つまり、この白黒の部分は、それ自体全体の時間感覚から脱線しておきながら、登場する千差万別の人びとがあたかも意志統一した共同体のように見せかける。外枠の差異を創造しつつ、内枠の差異をご破算にしてしまう。

### 既成道德輕視の巧妙な手法

伊丹の作品はフアビュラと同時に既成道德も輕視し、ひたすらスエゼで觀客の心理に訴えようとする。たとえば、「お葬式」はまずわけのわからない肌色の物体で始まる。カメラがお婆ちゃんの手の上までテイルトゥ（固定したカメラの角度だけ上下する ③）で下がって、はじめて我々はこの不可思議な物体が兩宮お婆ちゃんが座って居眠りをしている椅子の枕の部分だとわかる。この謎々の印象はしぶとく我々の頭に残り、お婆ちゃんが居眠りして見ている夢の中や、彼女の気持ちの中まで浸透する。そして彼女の夢は何かそういうわけのわからないものでモヤモヤしているのではないだろうかとか、お婆ちゃんが経験する夫の葬式も同じように割り切れないものではないだろうかとか想像してしまう。真吉のあまりきれいな癖、固く合掌した手、そして青白くなった足などは、生々しすぎて親しみを感ずるべきなのか、気持ち

悪く思っているのかわからない。どうも映画に出てくる家族も同じように感じているらしい。雨の音、風の音、葉が風に揺れる音、靴の足音、念仏、電話のベルなども、登場人物が感じたままに、時には他の音より大きく、時には小さく、その時々に応じて聞こえる。監督が登場人物と観客の知覚を一致させるのだ。

佗助が子供たちに真吉の死を伝える場面は、千鶴子が夫と子供に寄せる関心と葬儀屋と交渉するマネージャーに寄せる関心の割合を視聴覚化する。

千鶴子はまず子供部屋が見える戸を開ける。すると、佗助の姿と声が我々の視界に入る。これが最初の千鶴子の関心事だ。マネージャーは見えず、声だけが不鮮明にラジオが鳴っているかのようにボソボソと聞こえる。ところがこのマネージャーがお棺の値段を聞いたとたんに、千鶴子の関心はマネージャーのほうに飛び移る。それに合わせてカメラもマネージャーに焦点を合わせ、佗助の声をマネージャーの音量に下げる。このスエゼは、千鶴子が多分に夫や子供に関心をもっているながらも、いざ金のこととなるとそちらの方が先決問題と考える人であることを物語る。彼女は資本主義のごく当たり前の一員らしい。伊丹は個性をおもしろおかしく表現することはしても、評価はしない。

## 人間性表現のためのスペースの効用

伊丹は音だけではなく、スペース(面積の割合)の使い方でも人間性を表現する。家族が真吉の遺体を見るときは、真吉の気持ちを表わすべく空白を画面に残す。まだ遺体が病院に在る

時、家族と葬儀屋が上から彼を覗く。カメラは真吉の眼の位置にある。画面は皆の顔で縁どられ、真中にポツと裸電球がともっている……あたかも真吉の魂がそこに在るように……。もし生きていたら、彼の頭は多分そのあたりに在るだろうし、それより、皆して今のように頭をそろえて自分をのぞき込むようなことはしていないだろう。裸電球はそういうことを咥いているように見える。棺の蓋を閉めると、皆から真吉が見えなくなるのではなく、真吉の方向から皆の顔が隠れる。そして暗やみがちよつと淋しい感じをさせたかと思うと、お棺の小さい窓が外側から開けられて、「お顔は、ここから拝めますので……」という葬儀屋の声がする。これでちよつとホツとするのは真吉も観客も同じだろう。

家族が真吉の顔をのぞき込む場面はもう一度ある。この時は、皆、真吉の何か月前の写真を見ている。軍隊の勲章など胸に付けてちよつと立派に見える。佗助も「何だか笑われているような気がする」などと言って面食らっている。画面の下半分に集まった生きている人の顔の上に長方形に開いた空間が、いかにも皆の頭の上にのしかかっていた生前の真吉の自己表示の名残りのようだ。最後に小窓から真吉が見上げるのは、千鶴子と正吉の顔だ。この時も、病院にあつたような裸電球が、今度は灯されずに正吉の頭の後ろに半分隠れて遠慮がちに下がっている。千鶴子と正吉は和気あいあいと正吉が真吉にかけてやつた眼鏡の話をする。天井のように見える空間は二人のくつき合った頭でバツに消されている。真吉が眼鏡をかけてくれた兄と心配してくれた娘千鶴子に「この世はあなたがたにまかせて、安心してあの世にいける」とも言っているような、そういう気持ちスペースで表現したようなミザン・セン（画面の構

図 mise-en-scene) だ。

## 差異併存のさまざまなモデル

伊丹の差異併存社会には、この世の事柄もあの世の事柄も属する。二つの世界を隔てるのは薄い煙の幕一つ。家族が真吉の写真を見ている時、真吉があの世界に行き切れずにその辺にさ迷っているかのごとく、線香の煙がゆつくりと漂う。葬儀屋が坊さんをどう接待したらいいか説明している時も、マネージャーの煙草の煙が神秘的に話者の顔の顔を横切る。葬式が終わって、千鶴子、佗助、そして母親の三人が葬儀に使った物を焼き払う時も、あの世へ昇っていくような焚火の煙がのびのびと空に舞う。これらの煙は未知の世界を暗示させるが、恐怖感はない。ポストモダン思考では、この世とあの世の衝突はない。

年寄りも差異の一員だ。例えば、真吉の親友は耳が遠い。頭も他人が言うことを繰り返す以上の作業をしない。他の者が話に花を咲かせている間に眠ってしまったって一人暗い部屋にとり残される。確かに若者についていけない。でも、後で見つけられて謝られると、「どうせ同じことだから」と答える。彼ほど年を取ると、明るくても暗くても、一人でいても大勢でいても、問題にならないらしい。だから、年寄りは若い者の邪魔にならない。

ポストモダン社会には、聖職という大きな機関もかかわっている。坊さんが優雅にして眩いロールスロイスで雨宮家のドライブウェイに滑り込む。広角レンズ（前方が後方に比べて極端に大きく見える wide angle lens）で捕えた車体の前方が、スカートを広げたようにふわっと大きく広がる。言わずしてこの豪華車は、その属する機関の威厳と富と腐敗を匂わせる。明ら

かに葬式に参列する一般民とは別の世界から来ている。霊柩車もそうだ。屋根に黄金の竜の  
たち、扉がまぶしく輝く。この車も我々の眼前でふわつと広がる。でもこの車は、坊さんの  
ロールスロイスほど排他的ではなく、一般市民を火葬場まで連れていつてくれる。一生を全う  
した人のタクシーだ。画面をすいすい走っていくところを見ると、とても乗り心地がよさそう。  
どうも聖職機関は、完璧に排他的でもないらしい。ここでも差異の併存が見られる。

### 差異としての女性を存在させない表現の数々

フェミニストの中には、ポストモダン思想がせつかく男尊思想に立ち向かい始めた女性論争  
の予先を鈍らせると嫌う者もあるが、「お葬式」中の女性には、男性と権利を奪い合う気持ち  
も必要もないように見える。彼女らは男性の尻に敷かれてもいないし、男性を尻に敷いてもい  
ない。近代まで続いた家父長制的「女隠しのイデオロギー」(金井 33)、つまり女を「陰」  
あるいは「異」とみせる思想を乗り越えて、男女は無頓着に自らをむき出しにしている。責任  
も男女が適当に分担をしている。佗助が子供におじいちゃんの死を知らせる、車の運転をす  
る、棺運びを手伝い、最後のスピーチの練習をする。これらは家長の役割だ。でも佗助に葬儀  
の主催を納得させ、おすしを注文し、マネージャーに銀行からお金を下ろさせ、通夜の夜に客  
を家に引き取らせるのは千鶴子だ。彼女の役割は佗助のに比べると舞台裏的で二次的と言えな  
いでもないが、伊丹自身は必ずしもそうは意図していないようである。これは、伊丹がフアビ  
ュラと直接関係のない部分で描く女性像から判断できる。その女性は「従／陰」の位置を占

めていない。男性のほうがかえつて退屈な生活をしているように見える。特に白黒の部分で  
てくる男性は、床に寝ころんだり、座ったりして、控えめに観客／カメラを見上げる。このハ  
イアングル・ショット（カメラが物体の上から見下ろす high angle shot）は一般に人物の心  
の貧しさを象徴的に描写するのによく使われる技法である。一方、女性は屋根にまで登つて  
我々を見下ろす。このローアングル・ショット（low angle shot）は彼女らの自由奔放な気持  
ちを表現する。概して女性にはよく笑うし、男性より自由に見える。答辞の準備でどおどして  
いる佗助を出し抜いて名乗り出るのはお婆ちゃん。心おきなく大声で泣くのも女性だし、この  
忙しい時に遠慮なく佗助にセックスをせがむのも斎藤という女性だ。この視覚にうったえるサ  
ブ・テキストは、伊丹が「女隠しのイデオロギー」に賛成していないことを物語る。

### 「肯定的」男女像が語るポストモダン

ところで、自由な斎藤という女性とは、自然の中を動物のように走り回る唯一の人である。空  
を見ると、「このまま夜になるのね」と呟き、佗助に愛しているかどうか訊く。彼女の意味す  
る「夜」とは「死」のことだが。人づき合いに明け暮れしていると、自分のしたいことをしな  
いうちに一生が終わってしまう。千鶴子などには世間通り一遍のことしかわからないが、斎藤  
の心の目は日本社会の向こう側まで見抜いている。イメージとしても、千鶴子は丸太のぶらん  
こで同じ一直線の軌道を行ったり来たりしているだけで、夫がすぐそばで愛人と関係してい  
ることすら知らない。夫の服が汚れていてもその理由を訊かずに満足している。斎藤という

と、彼女のほうは自由を究極まで堪能して帰って行く。二人の性格は対極的だが、衝突してポストモダンを亀裂させることもない。

多分これは「お葬式」のポストモダン社会が、現世的で、平等で、あまり細かいことにこだわらないからだろう。人が死ねば、「苦しまないで死んでよかった」とか、「お医者様もできるだけのことはしてくれた」とか「安らかなお顔をしている」とか、当たり前障りの無いことを言い合う。何か月か前に撮った写真の中の真吉が安らかに見えればそれでいいとする。正吉も通夜の夜泊まつた宿の風呂と便所がきれいで朝食が美味しかったので満足だと言う。迫力ある車の追いつき場面もあるが、その動機は「ベンハー」の馬車競争とはおおよそかけ離れていて、佗助が隣の車に乗っているマネージャーにサンドイッチを渡そうという、いうなればとぼけた理由だ。この危険を犯しての努力もマネージャーが餓死寸前だから助けなければならぬといった大それたものではなく、「せつかくだから」といった気やすいものだ。皆呑気だ。葬式に来た人も、坊さんのお経を聞くより、風に舞い上がるお金をつかまえるほうが先。同じ心境でいるから、千鶴子と母親が布団を敷くときは、動作も布団の柄も一緒。坊さんが経を詠んでいる時、皆の足が痺れる。マネージャーの足も痺れているから、電話に出ようとして立ち上がったとたん、ひっくり返る。こういう時、皆はお経に聞き入ったふりをして笑いをこらえる。死を悼みはするが、それでも遺体が火葬されると誰もがはつとする。お婆ちゃん、夫の死の瞬間付き添ってやれなかったと悔やむが、葬儀にたくさんの人がきてくれたので、真吉も心残りが無いだろうと、うまく挨拶の言葉を締めくくる。ヒュセンの言葉通り、ポストモダンの思考方式は概して「肯定的」(Huyssen, P.251) じゃあ。

(続く)

# 花の命は短くて…

長島 晶子

(NHK名古屋放送局)

「女性キャスター」は、時代の花形職場だと言われている。しかし、同じ報道の職場にいると、なぜ、皆、キャスターに憧れるのか、よくわからない。名古屋局の場合、二名の女性アナウンサーを除いて、キャスターと呼ばれる女性は全て、契約社員である。半年毎に、契約を更新して、仕事を続けている。私は、更新の時期になる度、彼女たちの悩みを聞いた。「まだ、何の打診もない。次の仕事は無いのかしら」「声が掛からないから、辞めなければならぬのかしら」「新しい人を雇ったみたいだけど、誰が辞めさせられるのかしら」etc……。

事実、私が、名古屋に赴任してから三年経つが、この間にも、五人のキャスターが、会社を辞め、新たに六人が採用された。採用の方法は、たいてい一般公募で、オーディションを行い、面接等で決定している。オーディションの時には、男性たちが賑やかである。集まった若く美しい女性たちをひと目見ようと、スタジオへ駆け付ける。応募してくる女性は、それぞれ輝かしい経歴の持ち主で、元ミス〇〇という方が多い。

報道の現場には、まだまだ女性は少なく、採用されて間もないうちは、男性の多い職場の中で、可愛いがつてもらえる。しかし、一か月、二か月と経つうちに、状況は変化してくる。すなわち、「この娘は、仕事ができるか、できないか」というシビアな視線に、周囲が変わってくるのだ。可愛いという評価は長続きせず、飽きた社員の中には、蔭で悪口を言い始める者も出る。その度に、「あなた方が採ったんでしょ」と声に出して言いたくなる。笑顔で入って来た彼女たちが、一年後、冴えない表情で、溜め息をついていると、こちらまで遣り切れない気持ちになる。しかし、悪口を言われているうちは、まだましで、そのうち、話題にものぼらなくなつたらもつと悲惨である。たいてい、二年後には、契約更新の声が掛かることなくキャスターを辞めることになる。自分がもう、必要とされていないという周囲の空気を感じ、職場を去つていった女性たちを何度も目にしてきただけに、四月、新体制で番組がスタートし、新

人キヤスターが笑顔で入ってくる度に、複雑な思いがする。

しかし、全ての女性キヤスターが、このように寂しいピリオドを打つわけではない。生き残れるのは、同じニュースを読んでいても、一味違う、何か光るものを持っている人である。例えば、ニュースを読む際、声の調子、顔の表情は重要である。だいたい、五分という寸法で、事件・事故から文化情報まで、様々な話題のニュースが三本くらい入る。この短時間に、これらを如何にめりはりつけて読めるか、そして、ニュースの合間合間に、タイミングを見て、如何に気のきいたコメントを言えるかに、差がでてくる。

情報を伝える先は、不特定多数である。どれだけ多くの人に、共感をもってもらえるかは、そのキヤスターのバックグラウンドに関わってくる。一言発する背景に、どれだけ多くの事を経験しているかで、語り口が決まってくる。キラツと光るコメントを言えるか否か、そのキヤスターに対する評価の分かれ目である。経験値が少なく、ほとんど上滑りなことしかいえない。こうしたところで、個性が発揮され、人を魅きつける武器となる。

現実的には、キヤスターは、大学を卒業して直ぐ採用されるケースが多く、「お嬢さん」と、固有名詞で呼ばれないで終わってしまう。可能性のある仕事であるだけに、非常にもつたいないと思う。契約という縛りがあるため、キャリアを磨ける環境もない。社員であれば、比較的長期的に人を判断してくれる。しかし、契約社員のキヤスターは、短期間で勝負しなければならぬのだ。スタジオの単なるお飾りで終わってしまう程、つまらないことはない。イメージで、この仕事を選んで欲しくない。契約上の不安定さは、承知しているのであろうが、現状は、若さと美貌の使い捨てのような気がする。採用当初は輝いていた人が、二年経つと、美しい顔を曇らせて、会社を去る姿など、同じ女性として、もう見たくない。

根回しや事前交渉ばかりの我々と、堂々と議論することを尊ぶ彼らとの心理的な差がありそうに思える。とはいえ、揶揄や嘲笑を込めたユーモア気分もたつぷりある言葉で、目に触れる機会は結構多い。

私がケンタッキーに滞在していた頃、ノース大佐が議会に呼ばれ公聴会で査問されるというイラン・コントラ事件で全米がゆれており、大統領（当時レーガン）自身、議会にも国民にも秘密の裏取引をしたカドで、訴追をまぬがれない勢いだった。連日の新聞報道でこの単語を見ない日はなかった。わかったようでわからないこの言葉に対する当時のもどかしさを思い出す度に、今もおかしさがこみ上げてくる。

後続の荷物に入れた辞書が届かず、手元には現地調達の日英辞典があるばかり。少しこみ入った内容や単語に“？”信号がとると、時として英英辞典を引くことはさらに混迷を深める。表題の語は、私にとって正にそんな単語だった。

結局、大局的見地からの判断（？）でレーガンは訴追をまぬがれた。連日登場する政治漫画の中で、レーガンのタガのゆるんだ顔の下の "Not guilty for serenity" 「老齢につき無罪」という文字が目にとまった。「このユーモア感覚がたまらない」と送った私のエールに、ほこらしげな表情で「我々はコントラヴァーシャルな国民だからネ」と、コントラ事件に語呂合わせしたような、茶目ついたつぷりな応答がホスト・ファーマーから返ってきた。

「いわくつきの／うさん臭い」のニュアンスで使われるのも確かなのに、ジメツとしていないのは、大統領選挙から司法取引に至るまで、どこか醒めて突き放したようなアメリカ国民の持つゲーム感覚と無縁ではなさそうだった。serenity にしても、ボケに近いニュアンスは伝わってこない。

蛇足ながら、先述のCMは、ケネディ暗殺で副大統領から昇格したジョンソンの、初の自前選挙時のプロパガンダ（宣伝）フィルムである点を申し添え、時代背景の説明に代える。

## コントラヴァーシヤル (controversial)

奥川 睦

1964年、大統領選挙で民主党のジョンソン候補がキャンペーンに使ったCMフィルムがある。"Peace Girl/Daisy" と名付けられたこの作品、NBC系列局で放送されると、たちまち共和党から「自分たちが小さな子どもを殺しているように思われる」とクレームが付き、放送中止となったいわくつきのものなのだ。

内容は「少女が野原で、ひな菊の花弁を一つ、二つ、三つ、と言いながらむしりとついていると、やがてその声が原爆の秒読みの声とオーバーラップして、3、2、1、ゼロ、ドカーンと、きこ雲があがる絵に変わる」というものである。

A girl counts to 10 on a flower (daisy) and then a voice counts from 10 (a countdown) as a zoom-in on the girl's eye becomes the mushroom cloud of an atomic explosion. The message is: vote for Johnson or the Republicans may destroy the world. Vote for Johnson, says the narrator, because the stakes are high.

『海外TVコマーシャルの英語』（研究社）より

このCMは一回きりで放送を中止したが、そのことで逆にニュース性が高まり、週刊誌の表紙になったり報道されたりで人々の目に触れ、話題性を高めてしまったという。イギリス王室図書館も資料としてプリントを買い上げ、ブリタニカも「最も物議をかもし出した政治宣伝 (The Most Controversial Propaganda)」と記録した、と説明されている。

辞書の controversial の説明、「議論の（ある）議論好きの」では、実際使われる文の中でのニュアンスはほとんど伝わらない。「いわくつきの、議論が議論を呼ぶ、簡単に結論が出ない」くらいの訳語を用意する必要がある。そうだが、「簡単に結論を出すような軽い扱いをしてはいけないくらい重要な」のニュアンスもあり、「物議をかもし出す」というような訳語を当てた時でも、我々日本人が感じる否定的含みは少ないように思う。議論ができず、

## 北京会議へ向けて地域会議を

十月に江の島と東京ほかで

## 「東アジア女性フォーラム」を開催

中国・台湾・香港・韓国・北朝鮮・モンゴル・マカオの三地域五か国の女性を迎えて、九五年北京会議の「東アジア版」ミニ会議を開くことになりました。

きっかけは、九三年十一月一六日―二一日の通称「マニラ会議」(ESCAP「国連アジア・太平洋経済社会委員会とフィリピンの女性団体の共催によるアジア・太平洋・NGOシンポジウム」)。ここで北京のNGOフォーラムのための地域準備会が開かれ、六二二人が参加、国連に提出するNGO行動計画を作成、さらに五つの地域に分かれて討論しましたが、その東アジア部会で、いろいろホンネの発言が出ました。「NGOの会というのに台湾の参加が拒否されたのはおかしい」「北朝鮮にはマニラ会議があるという情報も伝わ

らなかったようだ」「モンゴル以外は、すべて儒教文化圏。共通の問題があるのでは」「東アジアの女性たちは概して英語が不得手、インドやフィリピンなど旧英米植民地の人たちの発言に押しまくられる」など。

マニラ会議でのメインテーマは「開発における女性」。開発によつて男女の不平等はむしろ拡大し、環境も貧困も悪化したことが問題になりましたが、この問題の追求をさらに深めつつ、東アジア独自の地域準備会を開こう、と「東アジア女性フォーラム」を結成、その第一回会議を日本で開くことになった次第です。国際会議に不慣れなアジアの女性たち。北京会議に向けて少しでも準備を……という心づもりでもあります。

この何か月か、数人の準備メンバーで叩き台を討論してきましたが、五月一四日、実行委員会設立総会で主な柱が可決され、本格的な準備を急ぐことになりました。

## 主な目的は

一、東アジア地域の女性たちに共通する問題についての経験

## 交流や情報交換

①急速な経済発展がもたらす女性への影響

②儒教的家父長制伝統文化の影響

## 二、東アジア地域の女性運動のネットワークの強化

①国際女性運動への積極的参加とリーダーシップの発揮

②北京女性会議へ向けての明確な意見表明

この目的の実現へ向けて、十月二―二二日、江の島のかながわ女性センターに合宿して討論、二三日は東京の日仏会館ホールでまとめの公開シンポジウムを開き、北京会議への意見書を作成します。

参加人数は、江の島が海外参加者が七三名以内（かながわ女性センターの宿泊人数が七三名のため）、国内参加者が七〇名前後（海外参加者とはほぼ同数にしてバランスをとる）で、参加者は制限されますが、東京の公開シンポジウムは四一五名、ほかに北海道・名古屋・京都・北九州でも公開シンポジウムを検討中です。

討論のテーマは①開発における女性 ②女性の政治参加 ③女性の人権 ④女性と文化 ⑤戦争と女性の予定です。

会の名称は「東アジア女性フォーラム」、事務局は、横浜市戸塚区上倉田町一五一八 明治学院大学国際学部武者小

路研究室内。実行委員会代表は中村道子さん、運営委員長、

松井やよりさん、事務局長は羽後（はのち）静子さんです。

運営はすべて実行委員（個人でも団体でも可）のボランティアで実施。（あこら）は記録と広報を引受けました。録音、速記、ビデオ、写真その他、たくさんの人手が必要です。実行して下さる方、積極的に申し出を。

また賛同人も募集しています。賛同者は団体が一口一万円、個人が二千元、何口でも歓迎。ただし、特典はいつさいありません。（斉藤千代）

## 第四回世界女性会議に関心のある方

### ‘95北京会議への道”連続講座を開きます

来年は世界女性会議が初めてアジアで開かれます。地理的にも心情的にも近い北京、旅費も割安、とあつて、日本から二千―三千人参加するのではないかとうわさされています。

会議場は体育館、数万人の参加が可能な広いところのように、中国政府は「熱烈歓迎」の姿勢ですが、何といつてもアジア侵略という大きな罪を持つ日本。日本女性の参加の姿は注目されることになるでしょう。

国際会議というと、高くて遠いものに思われますが、NG

O（非政府組織）のフォーラムは、すべての庶民が国境を越えて語り合う開かれた場です。外国語ができない人こそ、ぜひ参加してほしいと思います。といつても、テーマは女性問題。なぜ世界女性会議が、そしてNGOフォーラムが開かれるのか、日本の女性の国際的地位は……など、基本的な問題を事前に学習しておく、と、参加する意味がずつと違ってくるでしょう。そういう意味で、東京女性財団から若干の助成を受け、〈あこら〉で連続講座を開くことにしました。メキシコ、コペンハーゲン、ナイロビ……と三回の参加を重ねて学んだこと、私たちが知っているかぎりのノウハウや最新情報も、できるだけ公開したいと思います。また十月には、北京会議の実行委員をお勤めになる中国婦女連合会の担当者をお招きして、直接現地情報も伺う予定です。

受講料は全八回で七千円です。会場（虎の門、国立教育会館会議室）の席に限りがありますので、事前に申し込みをしてください。一回だけの受講（千五百円）も可能ですが、全八回を通すと全体像がつかめますので、受講なさる方はできるだけ全回受講して下さいをおすすめします。少人数でじっくり話し合う会です。先着五十名限りですので、申し

込みはお早めにどうぞ。

予定は次のとおりですが、若干変更があるかもしれません。数字に○があるのは、日程その他交渉中。

- 1 なぜ世界女性会議が……（国連女性の地位委員会、女性差別撤廃条約、国際婦人年などの意味と役割）坂東真理子さん（総理府婦人問題担当室長）（六月二二日）
- 2 普通の女が参加すること——メキシコ・コペンハーゲン・ナイロビのNGO会議に参加して

斎藤千代さん（あこら編集部）（七月二〇日）

- 3 変わる流れ、変わるキイワード——知っておきたい基礎用語 茨城県立婦人教育会館館長、埼玉短期大学教授 深尾凱子さん（八月二六日）
- 4 激動するアジアと女性たち——日本を見る目——

松井やよりさん（朝日新聞前編集委員）（九月三〇日）

- 5 北京会議の特性と準備状況

中国婦女連合会国際連絡部副部長 張静さんほか（十月）

- ⑥ 世界女性会議とフェミニズムの流れ

交渉中（十一月）

- 7 世界の女性・日本の女性（地位の国際比較）

坂東真理子さん（総理府婦人問題担当室長）（十二月）

⑧ ウィーン会議・マニラ会議・ジャカルタ会議、そして北京会議——国内外の取組み

有馬真喜子さん（横浜女性フォーラム所長）（一月）

## 子ども買春で法改正要求の動き

大人を相手にするとエイズが心配……と、タイやフィリピンはじめアジア各地で少年少女の買春が急増しています。

ドイツでは昨年六月、海外で子どもを性的に虐待した場合でも、虐待者を処罰するよう刑法を改めましたが、オーストラリアでも近く刑法を改正、海外での十二―十五歳の少年少女との性交渉は最高十四年、十二歳未満は十七年の禁固刑、海外での子どもとの面前でのわいせつ行為は、十二―十五歳は十年、十二歳未満は十二年の禁固刑を課す予定です。

法務省は、「刑法の国外犯規定の改正は考えていない」と消極的ですが、日本も「子どもの権利条約」を批准した以上、十三歳未満の子どもの性関係を、強制わいせつ・強姦罪として罰する国内法を、当然、海外でも適用すべきでしょう。ついでながら買春防止法を海外にも適用させ、また国内の買春者も罰するよう、法改正を要求する好機でもあります。

す。組織的業者も含め、必ず「御用！」にしたいものです。

## 児童手当の給付期間が少し伸びました。

三月二十九日、日切れ法案で児童手当法の一部が改正され、同法による「児童」の定義も、従来の「当該児童が十八歳の誕生日を迎えるまで」から、「十八歳に達する日以後の最初の三月三十一日までの間にある者」と改められ、平成七年四月一日から施行されることになりました。

## 各地で活発化「市民新党」の動き

弱体の羽田内閣。最近、早期解散・中選挙区制による総選挙説が浮上、いわゆる造反派の旧政党への復帰がささやかれています。が、「中選挙区で聞えない者が小選挙区で勝てるわけがない」という意見も急浮上、「市民新党」の旗揚げは五月、六月が山場という予測も強くなってきました。多様な価値観を持つ市民各グループが、小異を捨てて護憲の大同で一致できるか、まさに正念場です。

〔新連載〕

# ペルーの女は立ち上がった (1)

## 序章 1

キヤロル アンドレアス  
訳 サンディ サカモト

一九八二年七月二六日の夜、ペルーの首都リマではミスユニバースコンテストが行われていた。このリマにあるコロセウム（円形演技場）で、美しく華やかに着飾った女性たちは勝利の王冠を競っていた。しかし、入り口に投げられた爆弾のため、新しく選ばれたミスユニバース（ミスユニ）は警官に護衛され演技場から急いで出てきた。そして優雅に着飾った数千人の観客もまた、演技場の両端の出口から逃げなければならなかった。ミスユニが選ばれるその日までに、何日間も、ペルーのフェミニストたちはミスユニ反対の抗議を続けた。そしてそのたびに、アメリカ製機動隊戦車から催涙弾が撃たれたり赤い水がかけられ、抗議していた女たちはちりちりに分散され続けた。そのため投獄される者もいた。野党の新聞は、自分たちの新聞に毎日ビューティコンテストの写真を載せていたにもかかわらず、政府がコンテストにむだなお金を費やすのを批判した記事も掲載した。ジャーナリストたちは、ペルーのほとんどの女性たちが、食物、水、教育といった基本的問題のために闘わなくてはならないことを指摘し、コン



テストは、多国籍企業をつくった製品を宣伝するために利用されているだけだと主張した。

ミスユニコンテストの日、リマで農民組合の会合に出席していたクスコ出身の若いインディオの女性は、テレビ記者に彼女の意見を次のように述べた。

「私が本当に言いたいことは、政府が女たちを利用しているということです。自分たちを売り物にしている女たちのために、人々のお金を浪費しているのです。私たちの多くは貧しく、病に臥しているのに、女たちはただ、いろいろな所につれて行かれ、最高のホテルで眠り、食事をし、化粧をし、贅沢な服を着て、一人一人が警察に護衛されているのです。それに比べて、私たちは何の介護もなく、泥の上で子どもを産みます。たくさんの子どもは食べる物さえなく苦しんでいるのに、政府はこんなことにお金を使っているんです！ ここにいる者は皆母親です。娘は履く靴もなく、息子はまともに履けるズボン一つありません。私たちは子どもたちにノート一冊買ってやることもできません。あちらこちらから紙を集めてやつと一冊のノートを作つてやらなければならないんです。女として、農場労働者として、怒りでいつばいです。美しさのために、人が売られたり、買われたりすることに、私たちは同意できません。この政府は本当に裏切り者で、反動的です。何回、神に懇願したことでしょう。人々が政治を担えるように、なぜ政府は降参し、滅びないのでしょう？ だからこそ、私たちは闘わなければならないんです。私たちは、今、組織し、これから抗議するつもりです。テリー大統領、フェルナンド・ベラウンデの意志はどうあれ、私たちの言うことを聞かなければなりません。たとえもし、わたしたちが政治犯用の刑務所であるフロントンに投獄されようとも、殺されようとも、抗議をやめることはないでしょう。私たちは死ぬことを恐れてはいません。もうたくさん

です！」

(\*エルフロントンは一九八〇年代に政治犯を収容するために新たに開かれた悪名高い監獄の島である)。

この陳述はペルーのテレビでは放映されなかったが、ペルーの大衆運動の中の女たちの意識の高まりを示しているといえるだろう。農場労働者の会合は三年に一回しかもたれない。これまでは、女性の実質的にはまったく組合を代表していなかった。そこで、この会合で女たちは、組織予算の四〇%をペルーの主要食物生産者である農村女性を組織するために使うことを要求した。

農場労働者の会合から一マイルも離れてない所にある政府官邸の近くのある教会の中で、女性工場労働者が、ハンストを始めていた。労働者は工場に保育所をもうける権利と物価に対する給料調整の要求をして、三六日間ストをしていた。しかし、会社との交渉はできずに、教会を占拠したまま、彼らの組合が認められるまで、いつさい食物を口にするのを拒否していた。

一九七〇年代半ばから、この教会の近くにある古いビルを、共同体の生活の場として暮らしてきた女たちがいた。そこには、一三人の子どもと家事労働者やメイドとして働いている二三人の女たちがいた。しかし、彼女たちはそこからの立ち退きを迫られていた。彼女たちは、売春制度や早婚の罠にかかったり、働いている家で女性たちが虐待されるのを防ぐために、地方から移住してきた他の若い女性と一緒に住むよう呼びかけながら、反立ち退き闘争を進めていた。

リマのダウンタウンでこのような事が起こっている間も、政府転覆を計ったとして告発されていた約四六人の女性政治犯は、都市付近の港町のカヤオに投獄されたままになっていた。彼



女たちの中に特別な破壊行為の罪に問われた者はいない。実際はそんな必要もなかった。ペルーの新しい反テロリスト法によつて、政府は「民主主義にとつて危険」と思われる人物は誰でも投獄できることになった。女たちのうちの何人かはすでに拷問のために気がおかしくなつていた。ある記者は、辺ぴな州からカラオにつれてこられた政治犯の名前を確かめようとして、自分自身が逮捕された（社会的圧力により、彼女は解放された）。政府は政治犯を都市に輸送して彼女たちを孤立させようとした。が、かえつて、政治犯の支援の層が広がり、政府は無能力で革命運動を抑制することもできないと思われ、信用を失つた。

この出来事は、リマのフェミニスト組織と関連のある女性調整委員会の注目を引くことになった。もともとは、一九七九年に仕事を締め出された女性たちによる工場占拠を支援するために、この委員会はつくられたが、その後、路線の違いから分裂した。ますます激化する弾圧と工場労働者、女性農業労働者、家事労働者による闘いの中で、組織を再構成するための会合もたれた。グループの再構成は市民間の団結というよりはむしろ全国的団結を予知するかのようになつた。また、党が他の問題で分裂している時、左翼政党内外の女性たちを、もつと親密に結び付けるかのようにも見えた。私が一九八二年八月ペルーを去つた頃は、こういう状況であつた。さまざまな弾圧にもかかわらず、私が初めて、南米に行つた一〇年前には想像もできなかったくらい、女たちは団結していて、自分たちの力をパワフルだと感じていたようだった。

チリでは、私の子ども三人と永住できることを望みながら、人民連合政府（アジェンデ大統領のもとで）の最後の年（一九七三年）に、農場労働者組合の女たちと共に働いた。しかし、

右翼軍隊によるクーデターが起こったため、私たちはチリを離れ、一九七三年二月に、生活しやすく働きやすい場所を見つけようと、以前と同じような思いを胸に抱いて、ペルーにやってきました。ここペルーでは社会変革が起こっている最中だった。

二、三か月のうちに私はワンカヨにある国立大学で社会学を教える仕事を見つけた。地方組合の支援活動をする一方で、町はずれの先住民でつくるコミュニティで、リマのスラム育ちの男性ラウールと生活を共にした。彼は、大人になってから山に戻った経験のある先住民男性であつた。

ワンカヨの町では、すでに警察の弾圧が日常茶飯事になつていた。このような状況のもとで、大学の学生と労働者は長期間にわたつてストを行なつた。そして大学の二期期はストとともに終わった。一九七五年十二月、私たちはペルーの首都であるリマに引越した。そして私の同志で夫でもある、ラウールの家族とともに、シャンティタウン（スラム）に住んだ。そこで、この激しいさなかにできた地域の組織活動に参加した。そして次の年（一九七六年）の収穫時にワンカヨの近くのマンタロ溪谷に戻つたが、そのすぐ後、私はペルーをあとにした。

ペルーに滞在している間中、私は約三〇の団体と個人に、南米の政治的出来事について定期的報告をした。彼らは、南米の日ごとに酷くなつていく搾取と政治的弾圧に非常に関心のある団体、個人であつた。ペルーを去つた後も、ペルーの家族や友人と連絡を取り続けた。それを通してペルーの女性運動が広がっているのを知り、私はもう一度、ペルーに戻りたいと願うようになった。一九八一年、偶然にも父が死に、少しの遺産を残してくれたので、それをペルーの



フェミニスト運動に使うことにした。私はペルーに戻り、たくさんの方の援助を得てペルー女性の生活と闘いをスライドにした。その後、米国各地をそのスライドを見せて回った。次の年以降、この本を書くのが目的で再びペルーを訪れた。ペルーの女性たちは、他の所で会った女性や多くのペルー男性とは何かが違っていた。彼女たちは、男性と同等の権利を持ち、尊敬されていた昔の社会構造の遺産である「前家長的」（母系制あるいは双系制的）価値をまだ持ち続けていたことを、私は以前よりもずっと深く認識できるようになった。女たちは部外者の前では、表面的には従順で謙虚だったり、「うまく取り繕うために」無知のふりをするが、必要な時にはいつでも怒ったり自分で決断を下すことができた。彼女たちは現代社会の知識を得たいとは思っているが、ほとんどの女性が民族的な衣装を身にまとい、自分たちの間では外部の人が理解できない言葉で話す。彼女たちは、子どもたちが、共同作業をすることを喜びとする価値観（インディオのコミュニティの価値観）を持っていないことを深く悲しんでいた。中には、問題をはっきりとらえて、政治的に自分たちを組織する方法を探している女たちもいた。また、彼女たちは、誰を信用すべきか、せざるべきかを学びつつあった。時々、私の方がかえって、このような発見をして驚くことがあった。とにかく、私はインディオの女たちの経験を記録していくことが彼女たちの役に立ち、彼女たちと友人になることを望んでいる、同じような目的を持つ人びとの役に立つことも望みながら、仕事を続けた。

私は、バランスのとれたペルーの歴史あるいは女性運動を描くつもりはない。むしろ、社会変革を理解するのに重要な隠された部分の歴史を強調しようとした。実際にペルーの政治発展

の様子を多少なりとも知っている人々、ペルーの人々自身、女性自身、学者とか革命家と称する人々でさえも、ペルー女性の集団的パワーの源泉を理解していない。ほとんどの人は、町のスラムや、地方の先住民コミュニティやジャングルで政治活動をしている女性の考え方や運動について全く知らない。また何の利益も得ることなしに、一方的な「開発」のために奉仕してきた、露天商、家事労働者、工場労働者として働く女性の考え方や闘い方についても、ほとんど知らない。

私は、おそらく一番影響を受けているであろう女性たちの目には届かなかった情報をきちんと記録することに専念した。このような情報はバラバラの事実や関係のない出来事からなっているわけではない。私は女性の歴史やペルーの歴史の中で、明確だと思われる事実や出来事を意識的に加えるようにした。そういった事実をこの本でより明らかにすることによって、歴史的事実がより決定的なものになるようにと願った。

この本の主役である女たちは、不成功に終わった改革の時期には、文字どおり生き抜くために闘い、特に、自分たちの家族の生活を守るために闘った。世界中のフェミニスト運動の発展に影響され、彼女たちは今、人間として彼女たち自身の歴史と目標を再び明らかにしつつある。彼女たちは女性として、またペルーの人々の正当な代表者として、自分たちの利益を守るために、大衆運動と革命運動のリーダーシップの役割を強いて担おうとしている。

私はこの本に書いている女たちの一員なので、中立な立場で書いているとは必ずしも主張できない。しかし、私は自分が偏った立場にあることを認めながら、情報を流してくれた人々が

関心を持つている問題についても理解しようとした。また私自身の観察や聞いにかかわっている女性たちの主張や要求に反する、アカデミックな研究、統計や新聞記事を調べることを習慣とした。数多くの資料を利用したが、読んだり、聞いたり、見たりしたことをそのまま鵜呑みにはしていない。すべての資料に同様のものが見つかった場合にのみ記述した。

私は、女たちがどのように国の社会的経済的構造に組み込まれているかを説明しようとしたが、学問的資料からの長い引用や表やグラフの表示は避けた。そうではなくて、私の書いた物が、誰にでも読めるように、物語風に出来事を描いた。しかしながら、この物語は非常に重要な内容のみについて語られる。というのは一つには、ペルー女性の歴史はまだ書かれ始めたばかりだからだ。

この本を書くにあたって、全体を余すところなく描くというよりは、むしろ選択して描くようにした。私の目的は、名前、場所、組織や出来事の長いリストを記録することよりは、むしろ考えや行動に刺激を与えることにあつた。

第一章では、何世紀もの歴史に関して、フェミニスト的考察なしに描いた。だから、この部分は議論の余地があるし、暫定的なものであるとも言えよう。しかし、これらの課題について私たちが討論できるように、まずこのような歴史を描写することは重要であると思う。

第二章では、太平洋沿岸のチンボテの町や、その周りの溪谷の女性たちの経験を描写している。ここでは、町と地方との両方における、外国による経済侵略の最近の影響を紹介する。この侵略の影響はまた、この本全体の主要なテーマでもある。経済的变化に反応して現れはじめた闘い方を一見することによって、読者はペルー女性の闘いが、よその国の女性の場合といか

に違い、かつ似ているかをはつきり掴むことができる。女性を組織することは非常にむずかしいが、封建主義社会のもとでは、「隷属的資本主義」（半封建主義、新植民地主義）社会のもとでのほうが、女性が自分たちを組織しやすいのは確かである。

第三章は、アンデス山脈の、特に農婦、農民、組合など非常に活動的な地域の先住民女性の仕事と政治活動について描いている。この章では、シエラ（山岳地帯）の住民の間での農地改革の影響を讀者に知らせる。一九七〇年代の改革政府は、初めのうちは、女性を無視することなく、イデオロギー、教育キャンペーンを行なったが、雇用や事業活動の機会を女性に与えるのに必要な構造的変化をもたらしはしなかった。この失敗のため、改革の基本を批判する者もいた。組合が自分たちのコミュニティでの影響力を取り戻すのを助け、自分たちの利益に反応できるようにするために、女性たちは男性支配の組合と闘わざるを得なかった。

第四章では、主に産業の影響で、地方の人々が移住することを強いられてきた町の地域組織（スラム組織）の発達に焦点を絞っている。町で生活するために闘う女性の運動を学ぶことによつて、左翼系政党内の女性と男性の矛盾や、スラム内の女性とその外に住むフェミニストとの間の矛盾も見えてくる。貧困層に多い無関心な、あるいは運命論者のな態度は、歴史上、宗教者に教え込まれてきたことだが、これは厳しい経済危機によつて刺激された革命活動思想とは対照的だ。この地域組織活動は、母の日に対する風土的抗議や、援助団体や政府官僚のこまかしと闘うために発展した見事な戦略によつて描かれている。

第五章では、ペルーの資本主義経済における女性の不安定な状況と、底辺で働く女性の政治闘争を通して生まれた闘争力と創造力について論証する。女性はさまざまな労働をしながら

（契約労働者、小企業経営者（自営業）、家事労働者、工場労働者、露天商などの仕事をしながら）生活を維持しているが、未来に対する幻想を持っている者はいない。スト、工場占拠、そして生活共同体をつくりだした努力と経験によつて、女性たちは組織することを学び、働く女性の意識は改革された。このような経験を通して、女たちは他の誰よりも男たちと競争しているように感じていたと同時に、男たちと一緒に闘っているとも感じていたようだ。

第六章では、ジャングルや遠く離れた山々で起こった民族虐殺に焦点を絞る。ここでは、アマゾンとアンデス地域が、ヨーロッパ人に征服される以前の、非家父長的文化価値とメステイ（混血児）や現代社会の家父長的文化価値とが対照的に描かれる。常に抹殺されるかもしれないという脅迫に迫られて、コミュニティの人々は闘うために団結した。そして敵への憎しみを育てていった。こうして、一九八〇年、ゲリラ戦が始まった。山岳地方を中心として、主に女性によつて指揮され、戦闘はジャングルだけではなく、町にまで急速に広まった。ゲリラ戦闘は政府に対する挑戦を意味するだけではなく、すべての大衆運動や組織に対する働きかけでもあった。大衆組織のメンバーはゲリラの成功に注目しながらも、彼らの生活に及ぼす直接の影響にシヨックを受けていた。

最後の章では、一九八四年、私の最後のペルーの旅までを描いている。ここでは、今日のペルー女性が直面している未解決の問題や未来の総まとめや批評をする。

貧民階級のペルー女性の経験を記録し、翻訳することは並大抵のことではなかった。私はこの本を書いている間、多くの人と一緒に住み、何人かの人と旅行もした。個人的には彼女たち

の闘争を分かち合いはしたが、私が彼らと全く同じように生活したわけではない。時には双方にとつて交流することさえ危険な時もあつた。これらの女性たちの思いや要求に忠実であるように、彼女たちに批評や提案をしてもらおうと、彼女たちの家に戻り、私が書いたものを大声で読みあげた。

ペルーに行くたびに、この本を中心となつた女性たちと親密な関係をもつことができた。最近のペルー訪問で、私は、リマのスラムに住む、ある女性の家に泊まつた。彼女はレフヒオと呼ばれる地域組織や女性シェルターを組織したり、バスケット作りのための協同組合や地方あるいは全国規模のスラム女性の会合を計画したりなど、多くの政治的活動をしていた。この地域の女性たちはピープルズキッチンを組織したが、救済特別手当を拒否されてきた（それは左翼統一連合の代表でもある、リマの新しい市長の支援に関する論争と関係があつた）。そのため、自分たちの家族を養うために、近くのアスベスト工場で働く男たちに、自分たちで作つたランチを売る仕事をしてお金を稼いだ。この男たちは、この工場で、リマのスラムでよく使われていた水タンクを作つたり、屋根を付ける仕事をしていた。この地域は、家の前にバスが停まるたびに、アスベストの粉が舞い上がるほど汚染されていた。しかし、工業国では、もはやアスベストは使われていないということは、当時、ペルーではあまり知られていなかったやうだ。事実、労働者や工場の近くに住む住民に、がんなどの致命的な病気を引き起こす危険があるのを知つていながら無視したとして、アスベストの会社が訴えられた多くのケースがあるということを知っている者は、私が話をした人の中には一人もいなかった。このような経験をした私には、女性たちが急進的な政治的行動をとる以外に方法のないことは明らかであつた。

## 江馬細香ミュージカルを見て

篠崎 典子

岐阜市文化センターホールへ一歩踏み込むと、若竹の香につつまれる。ミュージカル「An Echo」(女流詩人・江馬細香)の舞台装置用に天井までとどくほどの竹。能舞台を思わせる幕のないステージだ。「江馬細香」への私なりのイメージが、ミュージカルを見てどう変化するか……。そんなことを思いつつ、開演のベルを聞いた。

細香役の深尾明美さんの声は、奥行きの深いソプラノで、ホール全体に響いていく。スポットライトを効果的に使いながら、場面が移動する。オーディションで選ばれた村人たち(男女計一四人)も、生き生きと歌い、踊っている。村人たちの衣装は、グラデーシヨンのパッチワーク。細かい所までしっかりと作られているミュージカルだ。

ミュージカル・ナンバーは全部で一九曲。シャンソン風あり、アップテンポの曲あり、それぞれの場面を表現していく。ミュージカルの間で歌われた、「女の人生」というリズムミカルな曲では、出演している女性全員が、女のつらい人生をコミカルに歌い、踊る。この場面では、会場から拍手子も生まれ、なごやかなムードも。

輪中での水争いも取り上げられ、岐阜の地で見るとこのミュージカルの意義に、改めて気付く。時代の変化は、この輪中でくらししてきた人々の人生観を変えつつあるのだろうか？

細香と頼山陽は師弟の間柄。しかしおたがいを感じる気持ちが高まっていく姿は、見ている私にも、徐々に伝わってくる。江戸時代の末期、文化・文政の時代を生きた細香の一生も、現在の私たちと重なりあっている。

文字という媒体とちがった、もつとストレートな感情が、心をゆさぶってくる。第七章「三從総テ欠ク一生涯」と付けられた場面で、細香は、「アイアムフリー」の曲を歌う。百年以上も前に生きていた細香、その人が語りかけている何かを、見ている私たちの感性がキャッチし、おたがいにひとつになった瞬間であつた。次回の上演が待たれるミュージカルである。

「江馬細香」の原作者、門玲子さんとともにミュージカルを見られたことも幸運であつた。この機会に「江馬細香」BOC出版、「湘夢遺稿」汲古書院(来春再版予定)をもう一度読んでみるつもりである。

あごらめいこ

## 静かでさわやかな説得力と行動力

自称サムタイマー、自称ミーハーの

下村美恵子さん

ききて・重原惇子

下村さんは自称サムタイマー。

不動産業をおつれあいと経営するか  
たわら、接遇マナーインストラクター、  
ファッションアドバイザーなどの講師  
としても活躍。〈あごら東海〉では、  
「あごらを読む会」のリーダーをつと  
め、〈ウイン女性企画〉では運営委員、  
と時間も空間もフルに使って密度の濃  
い二十四時間を過ごしている。

その数々の仕事のうち、接遇マナー  
インストラクターという業種に対する  
彼女の取り組み方を少し紹介しよう。

この仕事は、簡単に言えば、あいさ  
つ、電話応対といった種類の社員教育  
を行なう会社の講師だ。各企業から彼  
女の所属する会社に依頼があると、講  
師として依頼先に出向する。

女性社員向けのコースも多く、その  
カリキュラムの中には、たいてい「身  
だしなみとは」「マナーとは」といっ

た講座が組み込まれていることが多い。

そこでどうしても避けて通れないの  
が「女性らしく」ということば。ある  
意味では男性の視点を感じさせるこの  
ことばを使わずに受講生にアピールす  
る方法はないのかと悩んだ末、「品格  
ある人間を目指す」というアプローチ  
を思いついたという。

「教育」と言う以上、彼女が属する  
企業には、その企業なりの理念があ  
り、方法論がある。「今はまだ私自身  
が学ぶ時だから」と、与えられた枠の  
中で自分の考え方との相違点を見つ  
め、妥協点を見いだしていくしなやか  
な彼女の流儀が、次のステップでどう  
生かされるか、とても楽しみだ。

〈ウイン女性企画〉の彼女の名刺の  
肩書はファッションアドバイザー。カ  
ラーアナリストの資格も持つ彼女のお



しやれの基本は、色にある。いつも色見本帖を片手に、自分に合う色を探して歩いているらしい。「そのスーツすてきね」と言えば、「これ？ 実はね……」ニンマリ笑って、いかに安い買い物をしたかを自慢し合う間柄である。リーズナブルな値段でも、コーデイネイトによつて最高級品にも見せられるテクニクと楽しさを、私たちは彼女から学んだ。決してまくしたてるのではなく、まず相手の長所を見つけ、それから具体的にアドバイスする

彼女の説得力には、みんな自然に耳を傾けてしまうようだ。

その彼女が、下村家では絶対的専制君主だという。高校一年の長女をはじめ四人のお子さんの生活自立ぶりを目のあたりにすると、さもありなんと納得できる。おつれあいはいうまでもなく、食事の用意はもちろん、家事全般をソツなくこなす家族がいればこそ、この超多忙な主婦も、主婦業に追いつくられることなく仕事に専念できる。「うちは放任主義だから」と彼女はサラツと言うが、家族をここまで育てるためには、相当の忍耐と絶対的権力が不可欠だったと私は確信する。自立した家族は、主婦にとってプラスであるばかりでなく、当人たちがその恩恵を最も切実に感じているのではないだろうか。人に頼らず、自分一人で何でも

できるということほど自由なことはないのだから。

おしやれにはお金をかけないけれど家族とのレジャーは最大限に楽しむというのが下村さんのポリシー。スキーでも海外旅行でも、その徹底ぶりは見事というほかはない。「八方美人」と自己評価する彼女だが、どうしてどうして、自分流の生き方、家族育てを貫くこの人に、そのことは不似合いだ。でも自称「ミーハー」は、同じミーハー族として「そのとおり！」と言いたい。一昨年の夏、へ下村満子さんに勝手に感謝する会に参加して、霞ヶ関ビルの上階から一階まで、一階ずつ探検して回ったのはおもしろかったネ。言い出しつべは、もちろん美恵子さん。いつまでもミーハー族でいてネ。

看護婦



と



(13)

## 小西洋子さん (1)

増田れい子

東京目黒区にある国立東京第二病院救命救急センター婦長になって四年目。一九五〇年岩手県生まれの四三歳。一歳年上の夫との間にふたりのこども（長女九歳・長男七歳）がいる。夫の母はもと東大病院の看護婦、十分に果たせなかった夢を洋子さんに托して全面バックアップしてくれている。長女はそういう祖母と母を見て、私も将来は看護婦さんになりたい……と胸をときめかせているようだ。

県立水沢高校を卒業、国立東京第一病院（いまの国立国際医療センター）付属高等看護学校に入学。卒業したのが七二年。

「クラスメートは三九人でしたが、看護婦になったのが八人、そのうち臨床に残ったのが三、四人、いま国立で看護の現場にいるのは私ひとりです。看護婦には向いてない、看護婦らしくない、ほんとにらしくない私が、看護婦してるんですよ。おかしいのよ。おかしいんだけど、向いてないことやるのも面白いんじゃないかって思ったり。看護の仕事が好きだったわけでも何でもなくて、ただ働きたかった。働くことが好きで、だから長く続けられたんでしょう。要するに人相手の仕事って面白い。人に対する興味ですよね」

歯切れがいい。仕事師という言葉がぴったり来る感じの白衣のひと。

国立東京第二……というのはもと海軍病院だったところ。ちなみに東京第一は陸軍病院だった。いま新病

棟の建設が進んでいて、近い将来、ベッド数は変わるはずだが、現在七八〇床、医師九〇人、看護婦三六四人の陣容。外来患者一日一、二〇〇人余り。

救命救急センターは、ベッド数八、専属医師一人に一、二人の研修医が張りつくほか、脳外科医長クラスのフォロードクターが常時バックアップ体制をとっている。看護婦は婦長以下二〇人。そのうち三人は看護士（男）だ。夜勤は三人体制で、月一〇回以内。婦長の小西さんも、土・日当直や深夜・準夜勤務あわせて月三回くらいをこなす。運び込まれる患者は一日平均二、三人。年間八六〇人。

ノートがある。左端に氏名、ついで年齢、性別、そして病名、病状。右端は結果。つまり存命か死亡かの記録。おそろしいほど（死亡）が多い。人間とは死ぬものなり……という実感がこみあがる。

症状別で段トツがやはり①交通外傷、ついで②意識障害 ③薬物中毒 ④心疾患の順。

「年とつたひとがバイクや自転車なんかで走ってて転倒したり追突されたり。年とつてひとりぐらしが多いでしょ、用足するのにバイクに乗るわけですよ。高齢者には生きにくい社会ですよ。若いヒトも交通外傷が多い。飲酒運転事故です。十七歳から二十歳ぐらいまでのひとの急性アル中多いですね。」

酒にからんで、刺し傷、心肺停止。自殺も絶えない。首吊り、腹切り、クスリによる自殺自傷。

病棟を少時のぞかせてもらった。交通事故で全身の骨がコナゴナになったかと思われる老人のベッド。看護婦さんが何か話しかけながらケアしている。じつと死んだように眠っている中年の女性患者。クスリをのんで自殺をはかったそう。二度目と言う。

「本人、死にたかつたのに、生き返らされちゃって……と逆に攻撃されたりしません？」  
そんなことを口走ったら、小西さんはピシャリといった。

「人間というのは、生きているのが最高の。自殺したがるのは生きたいからなの」  
自殺をはかつて果たさず、ここへ送りこまれた男性が、病棟で再度自殺をはかったことがある。ベッドを

抜け出し、窓からまきにとびおりようとしていた。一瞬遅かったら彼はとびおりていたろう。もつとも病棟は低層（三階）で下は草地、たとえとびおりても骨折ていどですんだかも知れないのだが、発見した看護婦は三十分ほどからだのふるえがとまらなかつた。「死」を引き寄せようとする鬼気迫るマイナスの強いエネルギーに、彼女は昏倒寸前になつたのだらう。地位のある初老の紳士だつた。

「ウツ状態だつたのでしょうかね。スミチオン（農薬）をのんで自殺をはかつたんです。

スミチオンは安く市販されてるんで多いんです、のんで自殺はかるケースが。クレゾール、消毒薬ですが、これも市販されてますんで、のんで運ばれてきますね。内臓がやけて腎不全まで引きおこした方、ここで命をとりとめました。〃バカなことをしました〃つておジギされてね、退院しました。やはり初老の紳士でした。

若い三〇代の男女の自殺もね、発作的にやります。十五歳の少女がマンションの四階五階からとびおりるというケースも。まわりがぜんぜん気づいてないんですね、その子が悩んでウツ状態になつてゐるのを。親子、家族のあいだでも会話がなかつたり、顔見て話すつてことしなくなつてゐるんですね。それで何か信号出していても、つかむチャンスがないんです。話を交わすのがキツイのね、このごろのひとは。何もいわないで暮らす方がラクなんです。ラクしてる間にこどもが自殺しちゃう……」

つい聞きたくなつて、こんな質問をした。

「小西さん、ウツ状態から自殺まで行つてそれで助けられた場合ですね、退院するときなんか小西さんはどんな言葉をかけるんですか。助かつてよかつたですね、なんては言わない？」

「ウツ状態になつてゐる人には、はげましは禁物なんです。決して軽はずみにはげましたりはしない。それは逆効果、背中押してゐると同じなんです。ですからいまの状態はどんなですか、いま一番したいことは何？ まだ死にたいと思う？ そんなことを聞きます。あとは精神科の先生たちが判断しますから、それに従つて対応を決めてゆきます」

交通事故や、高齢、過労、災害などによる肉体的なパニック、そして精神的なパニック。救命救急センターはその両者を引き受けて、とつさの間に暗を明に転換させる技術を駆使する場だ。

「十中八九のぞみがない患者を前にして、その残り一％の希望に病院スタッフせんぶが集中して見ん事、命を救った勝利の体験は生涯忘れられませぬ。

一昨年のことになりますが、たまたま十三日の金曜日にその事故は起こりました。二三歳の男性が二五〇ccのバイクで、イヌか何かをよけようとして鉄柱に激突したんです。肝臓をしたたかに打って運ばれてきて、どんどんどんどん状態が悪くなりました。肝臓の破裂です。さあ、どうするか。ドクターは決断しました。手術だ！ A型のひとだったんです。すぐさま集められるだけのA型の生血を集めました。その男性の会社の人百五十人、続々来てくれました。ウチの病院のスタッフも続々集まりました。二万三千ccの血が患者を救いました。肝臓半分切除したんです。肝移植手術に匹敵するような大仕事でしたが、見事に成功しました。助けよう、この一致した意気込みが、成功の大もとでした。心臓も一時停止状態だったのに、奇跡的にいのちを吹きかえました。三か月で退院できたんです。

いのちの瀬戸際のケースに、私たちは、ものすごいエネルギーを集中させ、ふるい立つんですね」  
むつかしいケースよ、どんと来い、の意気込みが、救命救急センターにはある。もちろん努力むなしいケースもある。

「運び込まれた患者の二〇％は、還らぬひとつとなってます」

人を襲う死。高度に発達したこの「文明」社会、とりわけ都市は人口の過密をよび、効率至上主義体制のもとで、人々は、より早く、より多く、より長く働かされる。ゆとりを失い視野はせまくなり、疲労し、判断力を失い、衰弱し、死との距離を縮めてゆく。死や危険のすぐかたわらで私たちの生はおののきといなみを余儀なくされている。そういう現代社会の影の部分が、救命救急センターにうつし出される。

小西さんが、ふとこう述懐した。

「ほんとうに、いまここにこうして『普通』の状態で息をして暮らしているということ、これは、奇跡なんじゃないだろうか。私、夫、義母、そしてふたりのこども。五体満足で健康でいるということだけで、エリートなんじゃないかしら」

生きていることへの報復のように事故にあい、また心を病んで運びこまれてくるひと、いのち。突然の衝撃に度を失い、恐怖の底で患者の多くが、健康でからだを自由に動かしている医師やとりわけ若い看護婦に、やり場のない怒りや嘆き、うつぶんを投げつけてくる。ショックがおさまるまでの間、患者の多くが、攻撃的だ。

「看護婦にどんなにあたろうと、安全、絶対的安心感があるわけです。看護婦は病んだ人からの責めのムチをしたたかに受ける役割を負ってますね」

国立東二には、いま病棟婦長が二四人いる。勤務は午前八時から午後は四時半までが定時だが、五つある委員会（教育、情報システム、記録、手順、業務）活動、看護研究会の仕事などが山のようにあり、帰宅は常時夜の九時、十時。家庭がある……のを理由につきあいは免れるが、どうしても過密長時間労働に明け暮れる。「家庭では私、おトウさんです。こどもが大きくなったこともあって、家事も買ひものもまるでやりません。夫が料理上手、義母が家のことをがっちり支えていてくれます」

医療職三級。基本給月額手取り三三万円に、扶養、住宅、夜勤、通勤手当などが加算されるものの、引かれるものも多く、手取りは三二万円。期末手当は五か月。

いま、夫が脱サラ状態なので、一家の経済力は、小西さんが持つている。

「私、大黒柱です」

小西さんはカンラ、カンラと笑った。

(いの頂つづく)

## あこら読書室

看取ること、生きること

—デンマークと日本—

—それぞれの老い方—

小室明子著

アドア出版刊

私たちが福祉、福祉、と口にするようになって、国の政策はなかなか進まない。高齢化社会へ進んでいるのに、誰もが安心して老いることのできる社会はいつ実現するのだろう。社会がなかなか動かないのは、もしかしたら、自分はなんとかなるんじゃないかという気持ちがあるからではないだろうか。それは自分の配偶者や子どもたちが自分を看ってくれるかも知れないという思いから。しかし配偶者や子どもが必ず看ってくれるとは限らない。自分より重病になるかも知れないし、早く亡くなるかも知れない。皆を見送った

後、自分一人になるかもしれない。老人病院でベッドに縛り付けられている自分を想像できますか。

私はこの本を読んで、デンマークの人々の生き方が少しわかったように思う。それは自己決定権を誰もが持ち、それを国が尊重するという構造である。日本で自分の最後の自己決定権を持っている人がどれくらいいるだろうか。

著者の小室さんは若い女性で、執筆当時、東京都高齢者対策室勤務、現在は東京都職員研修所調査研究室の職員である。祖母の看取りをがんばっている両親の姿を見て、自分はとてもできないと感じ、それではどうしたらいいのかと自ら海外研修に出かけたのだった。小室さんのあくなき好奇心がデンマーク事情をつぶさに知らせてくれる。その行動力は驚くばかりである。

そしてなぜデンマークに寝たきり老人がいらないのか、ぼけても安心して暮らせるのかを豊富な事例を通して教えてくれる。

著者は、一人でも多くの看護学校、福祉専門学校、各市町村の関係者に読んでもらいたいと、自費で贈呈していると聞いている。自分や自分の子どもの老後のためにぜひ読んでいただきたい書である。手に取れば軽いタッチで読みやすく、看取りをナットクしてしまう本である。

(吉川富士子)

### ひとり家族

松原惇子著  
文藝春秋刊

今、誰かと一緒に住む「家族」という形態から、「ひとり」になる、あるいは「ひとり」を選ぶ人たちが増えている。未婚・非婚・離婚・高齢者と、さまざまな理由から「ひとり家族」が

生まれる。

まず、ひとり暮らしの女たちのルポから。

「女三界に家なし」と言うが、特に独身女性の住宅事情は厳しい。単身者、年寄りには家を貸さないというのが実情だ。Mさんは、三〇代半ばで家を買った。それは彼女が有名企業勤務で保証人などの苦勞なしにローンを組みめたということもある。「女の人は好きな仕事と家があれば男なんかいらないんじゃないかしら」と、彼女は家が持てたことの安心感を語る。しかし、中にはひとりでいると寂しくて、結婚を心待ちにしている人もいる。何とか孤独にならずにいられるのは、親と友達がいるから、と言う独身女性も多い。特に離婚した女性は子どもの養育など親（実家）の存在が大きい。

ひとり家族の男たち——「独身の男は信用されないから身を固める」と上司に言われたRさん。彼は何となく四

〇代を迎えたが、結婚による束縛をあまり好まない。「まわりのやつらを見ても羨ましいとは思わない、自由がないですからね」と。ただ独身男性の場合、ひとり暮らしの女たちとちがつて、四〇になつても親の家に住み、親にパツツを洗つてもらつてゐる人が多い。そして老後の心配をしていない。男女の決定的なちがいは、男は何歳になつても子どもが持つてゐるのである。

家族がいてもひとり、というTさんは、「夫婦単位で物を考えるのをやめましょう」と夫に宣言した。依存し合う関係と協力し合う関係は全く異なる関係だと著者は言う。Tさんは二人の子どもを「孤独に耐えられる人間になるよう」育ててきた。「相手のことをあえて知ろうとしない、むしろ秘密を持って」というTさんは、従来の日本の常識とはまるで違ふ。「結婚してからの方が孤独だつてことは本当よ」という言葉は、私たち誰もの心に染みいる

のではないだろうか。

ひとり暮らしのお年寄り——ひとり最適で自由だというのは、収入と健康があればこそだ。若い人とちがつて、不安が多い。「家内に死なれて一番辛いのは、話し相手がいなくなつたから」というOさん。しかし彼は、子どもとの同居を拒否し、あえてひとりを選ぶ。一日じゅう家の中で誰ともしやべることなく過ごすのは想像以上につらいと思う。そして住宅問題。老人の場合、住まいの確保は死活問題なのだ。貸してくれないどころか追い出される。特に都会のお年寄りはやつかいもの扱いだ。

「ひとり者は一人前ではない」という無言の圧力は、ますます強まる傾向にある。結婚しない娘を親が追いつめる。ひとりイコール孤独、家族イコール幸福、のパターン思考が、私たちを縛っている。そしてひとり者に対する差別、公庫の貸付額や国民健康保険

料の既婚者との差、民間賃貸住宅、入院、手術の際の身元保証人、ガン告知も家族に対してなされる。あまりにもこの国は血縁重視なのである。「誰もがいつかはひとりになる。ひとりで生きにくい社会はみんなにとつても生きにくい。社会の最小の単位は個人である」と、くり返し筆者は語る。ひとりの人にも、ひとりでない人にも、読んでもほしい一冊である。（東倉啓子）  
（四六版 二五〇ページ 一、四〇〇円）

## はじめて拡がるグループネット

ウイン女性企画元氣印グループ編  
ウイン女性企画刊

大変お待たせしました。「あこら」181号で「グループで本作り」を書かせて頂いてから一年以上経つてしまいました。あの本はどうなったのと聞かれるたびに、ほんとにどうなったのかしらと担当者も首をかしげる不思議

さ。私たちは全ての原稿を出版社に送り、ただ出版を待つばかりでした。

それが一か月経つても二か月経つても出来てこない。私たちは昨年の秋まで待ちました。出版社は必ず出しますと約束されましたが、私たちはグループの性質上、これ以上は遅らせられないと、出版社の協力を得て自費出版にしました。

何しろ私たちが書いた原稿が日毎に古くなっていくのです。新聞や雑誌に紹介されているグループは勢いをつけてどんどん変わっていくのです。代表者はもちろん、内容までも。ミニコミ誌を作っているグループは新しいミニコミを次々に発表していくし、まのあけみさんは銃規制のために作曲をしたり、ヘチエルノブイリ救援中部へも、ミルクキャンペーンなどを始め、活動を広げたりしています。代表者の方が高齢で、お会いできないまま亡くなられたときは、とても残念に思いました。

原稿を手元において私たちは考えました。このまま出版していいものだろうか。出版社の社長はどんな調査も何年かことだからいいのではないかと言いました。しかし私は編集長として正確な情報は出せないと思いました。私自身、何かをしたいと思つたときに、本を見て初めて電話をしたとします。もし、代表は変わりましたと言われたら、そうですかと自分の不運を悲しみ、やる気をなくすでしょう。では新しい代表の方の電話番号を教えて下さいとは言えないと思うのです。初めは何もかも不安だと思うのです。

スタッフで分担をして、全部のグループに電話をして確認を取る作業を始めました。これは思ったより大変な仕事でした。特に私は電話が苦手で、早口になつてしまい、何度も聞き直され、汗びつしよりでした。やはり代表が変わつたところも多いし、代表がつかまらない。朝も昼も夜もないので

す。家族の方も気の毒がつてくれるほどです。忙しく活動している様子がわかりました。中には、アンケートを出したことを忘れていた方もいて、初めから説明をしたり、電話が通じなくなっているところも何か所がありました。

引つ越して連絡がなかったわけですが、それでも他の人から情報をもらい、やつと連絡が取れたと思ったら、もう解散しましたと言うところもありました。また連絡が取れず諦めていたら、引つ越した友達からミニコミ誌が送られ、その中で紹介されていたグループがあり、思わず神のお引き合わせなど思ったほです。

しかしそんな苦労も、「どうなったんですか。楽しみに待っていたんですか。一軒一軒電話をしてるんですか。ご苦労様です。がんばってくださいね」と励まされると、勇気百倍。三三〇以上のグループの確認を、今年の一月に終えました。そこで本の体裁を整え直

するため、コラムを書き直したり書き足したり、出版社まかせだったカットを配列したり。肝心の表紙や本の題名をそれから考え、仲間が表紙を自分でやってみたいと、出来上がりしました。

やはり一年という年月は私たちをも成長させてくれたわけです。最初のメンバー十人は七人になりました。残念ながらこの本の完成を見ずに病気で亡くなった仲間もいますし、家族の介護で協力という形でつながっている仲間もいます。それぞれが自分の得意分野を伸ばし、既に出版経験のある仲間は次作に取り組み、完成間近です。三人は新たに女性のための情報誌「暮らしあの人」のやり方いただき情報誌「ウイン女性企画ライター集団」を手掛け、三号まで出版し、一人は絵はがきを作った経験を生かして表紙を作成し、一人は自分の地域でウイン女性企画と同じ活動を始めたり。フリーライターと

して活躍している仲間もいます。私自身は、本誌の「北欧の家族」に書いたように思いがけず名古屋市女性海外派遣団として北欧を訪問し、新しい仲間とグループを作り活動を始めています。

この「はじめて拡がるグループネット」は、私たちのやんちゃな子どものようにも思えます。さあこれで一人立ちと思っても、いつも問題を出してくれて、最後の最後まで手を焼かせるのです。でも私たちは、この本はまだ完全ではないかも知れませんが、自信を持って「女性を元気にする本です」と申し上げます。何かをしたいと集まった私たちが作り上げ、私たち自身がこの本を通して学び、元気になりました。また、無名の女性が、仲間を作り、自分らしさを取り戻し、多方面で活躍している姿には、感動せずにはいられません。

いまこの瞬間にもまた新しいグルー

プが生まれ育っています。また皆さんにご紹介したいとひそかに願っています。新しい情報やご感想をお寄せください。

(吉川富士子)

(A5判 二八ページ 一、二〇〇円)

十冊ごとに一冊贈呈します。）

〔一九四号〕

つまり憲法改悪に必要な三分の二の残り三分の一を政治から抹殺するつもりのものだとはつきりわかりました。

私はおかげさまで元気です。  
心から支援を送りつつ。

一九四号はとても身近で、〈あごろ〉  
 ならでは、と思いました。

今年一年のつもりが、来年も購読しなくては不安なほど、細川政権を操る闇が見え隠れしています。

旭区で〈女性史研究会〉を発足させ、やつと軌道に乗り、来年は区の生涯学級の仲間入りです。横浜の女、神

奈川の女の歴史も垣間みる中から、何故、いつの時代も女の働きと智恵と社会運動が、男に掌握されてしまうのか、女性議員の減少とリダー性の欠如は女が女を引っぱっているからなのか、等々、考えこんでしまいます。女性党の出現があつていい時代ではないでしょうか。

(横浜市 安本節子)

### 録音速記の仕事をなさりたい方

講演・座談会などの録音テープを聴きとつて文章化する仕事は、話の内容が頭に刻まれて味わい深い仕事です。遠隔地の方も収入を得られます。でも、かなりの根気と感性も必要。ある種の適性もあります。勉強したい方、適性を試したい方は講座を受けて下さい。

6月24日(金) 1時—4時あこら

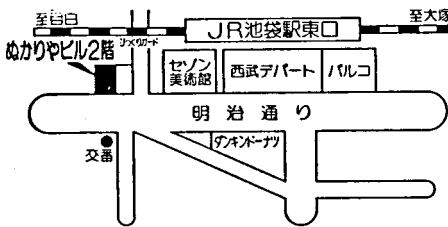
講師 斎藤千代さん

受講料 二千元(予約制)

### 女のクリニックがオープン

会員、宮川香織さんのメンタルクリニックが池袋東口にオープンしました。女性や子どものからだと心を守る施設、どうぞご利用を。(東京都豊島区南池袋1-16-20ぬかりやビル2F

☎03-3984-0804)



### 〔編集後記〕

〈あこら〉も二十余年の歴史を重ね、創刊の頃、小・中学生だった子どもたちも、今や〈あこら〉の若いメンバーです。

書棚から初期の色あせた「あこら」を取出し、その新鮮な感覚に驚愕。

創刊号に出会った二十二年前、私は子育て中の三十代でした。〈あこら東海〉の結成から始めて、心の実家はずっと〈あこら〉。〈東海BOC〉を経て〈ウイン女性企画〉とネットワークの輪が広がり、その中の〈あこら〉を読む会が、家族、とくに夫との関係に焦点を合わせてこの号を担当しました。読後感をぜひお知らせください。(ま)

### 〔編集協力〕

佐野真知子・下村美恵子・高橋ますみ・東倉啓子・戸田順子・西村晶子・柳澤つや子・吉川富士子・横田早苗江

「あこら」は、ギリシャ語で「人と人との出会うひろば」の意味。

女の生き方、人間の解放について話しあう「ひろば」。さくのない「ひろば」です。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう、と、

一九七二年以来、資料誌「あこら」（現在の「特集」）を、また一九七七年からは「月刊あこら」を発行しながら、さまざまな話し合いを重ねてきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにほしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなたの自身の情報を、どしどしお寄せください。全国各地の「あこら」拠点にもお出かけください。

●「月刊あこら」購読料は、月額八八六円から一、五四五円。

年間購読料は前納の場合に限り八、四〇〇円です。

●一年分を前納した方は会員になります。

●会員は次のような活動に参加できます。

①北海道から沖縄まで各拠点独自の活動（例会・研究会・各種集会・月刊編集その他）への参加

②月刊「あこら」の編集

③「あこら書房」の利用と運営

④可能性教室（「フェミニズム英語」「自立の心理学」その他）の企画と運営。

●申し込み方法

住所氏名・連絡先電話を振込用紙に書いて

年間購読料と入会金二、〇〇〇円を郵便振替・東京015264（あこら）へ。

●連絡先・〒160 東京都新宿区新宿一の九の四の三〇三

あこら事務局 ☎03-33354・3941

あこら 195号 ●発行 1994年 5月10日

●編集 あこら東海

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303

●03-3354-3941 ●03-3354-9014(FAX) ●振替00100-0-5264

●発行人 あこら企画会議 定価 948円( 920円+税28円)

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球

その 大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして あなた

かけがえのない地球

かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから

たいせつに たいせつに しょう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だけれども だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあこらへ

人と人の出会うひろば

へあこらへ

人と人の共に生きるひろば

定価 948円 ( 920円+税28円)

女による女の BOC 出版部

ISBN4-89306-019-8 C0036 P948E